露臺薄暮

ゆめ・たけひさ

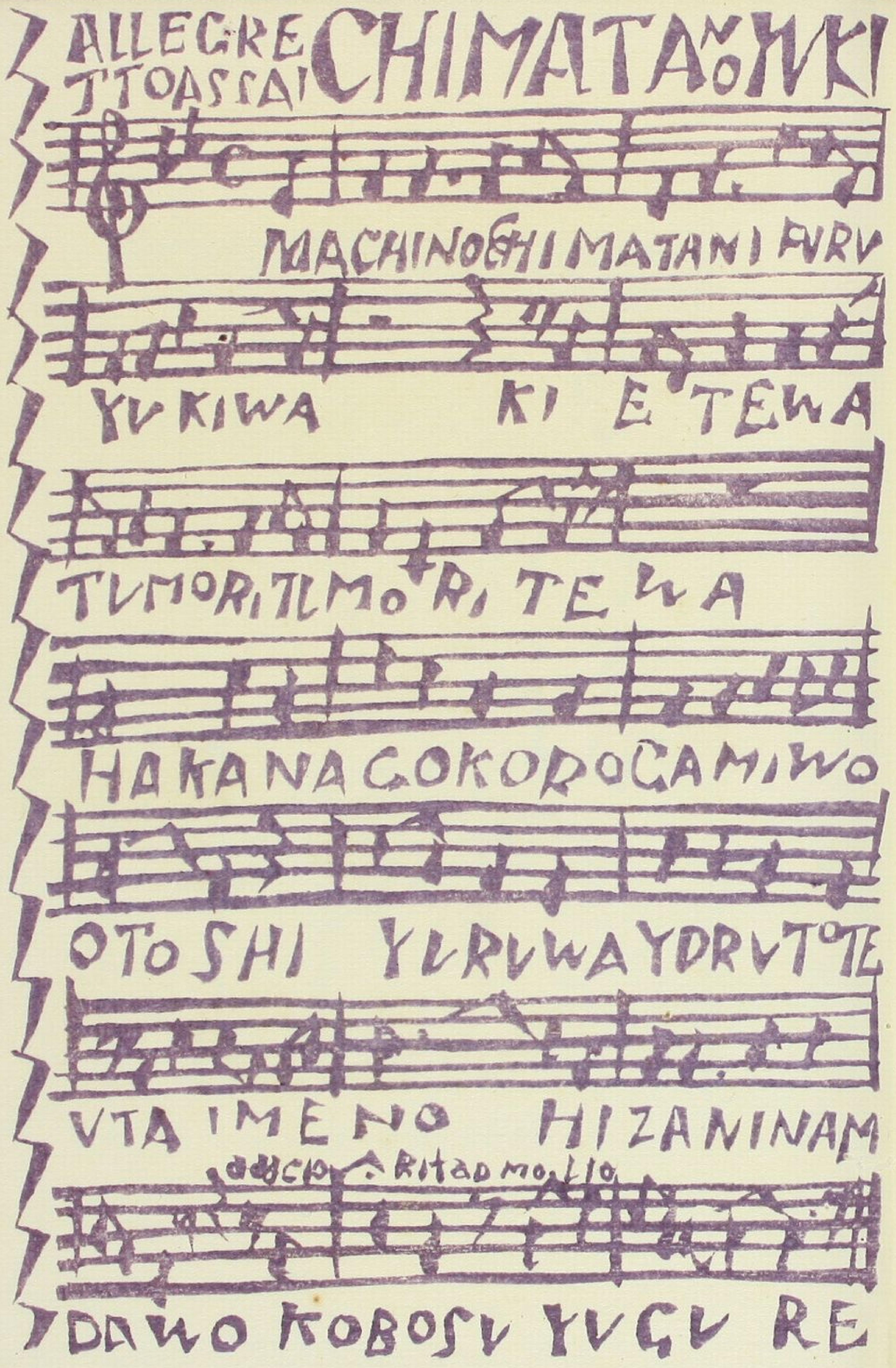
春陽堂版

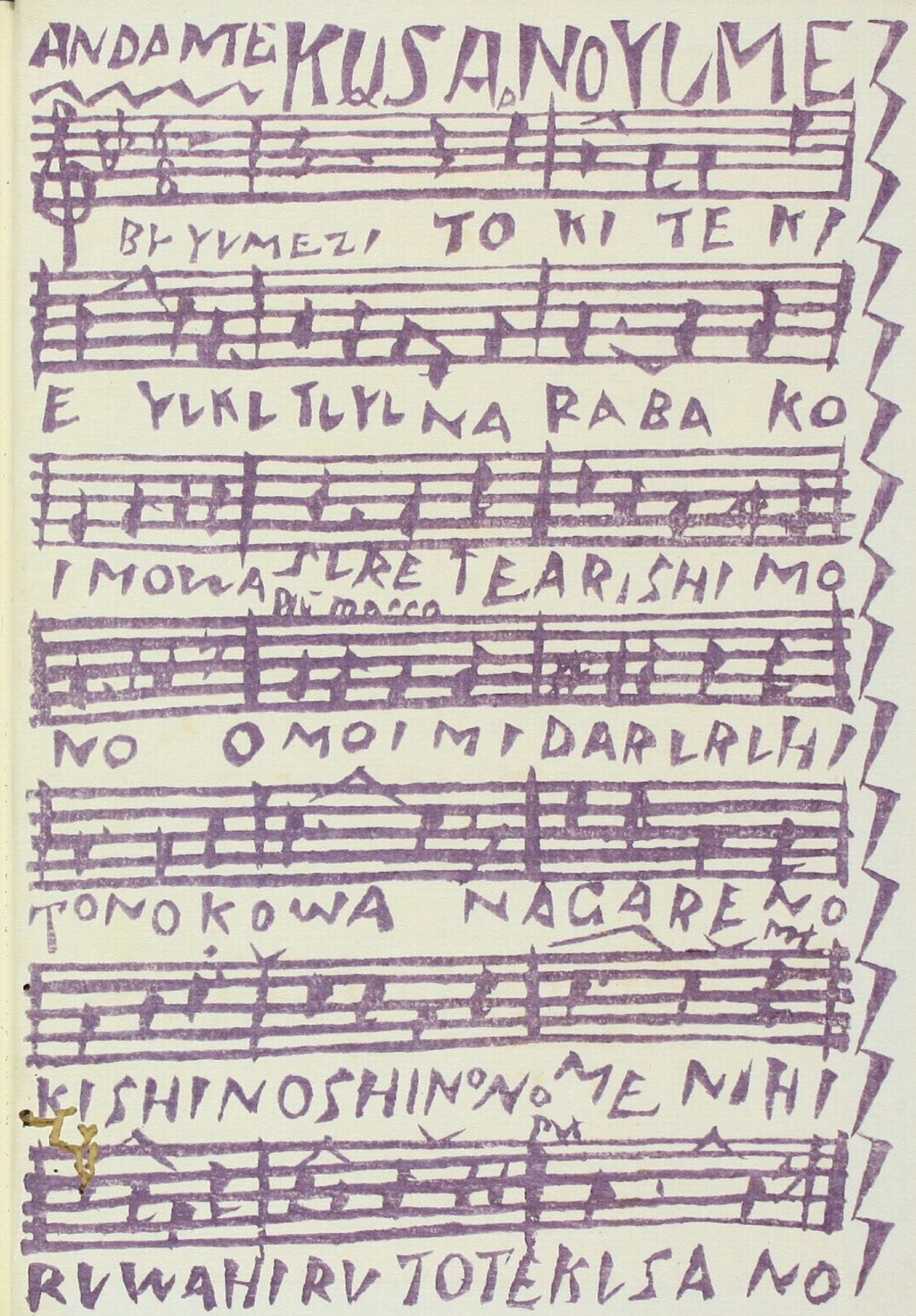
1927

露臺薄暮

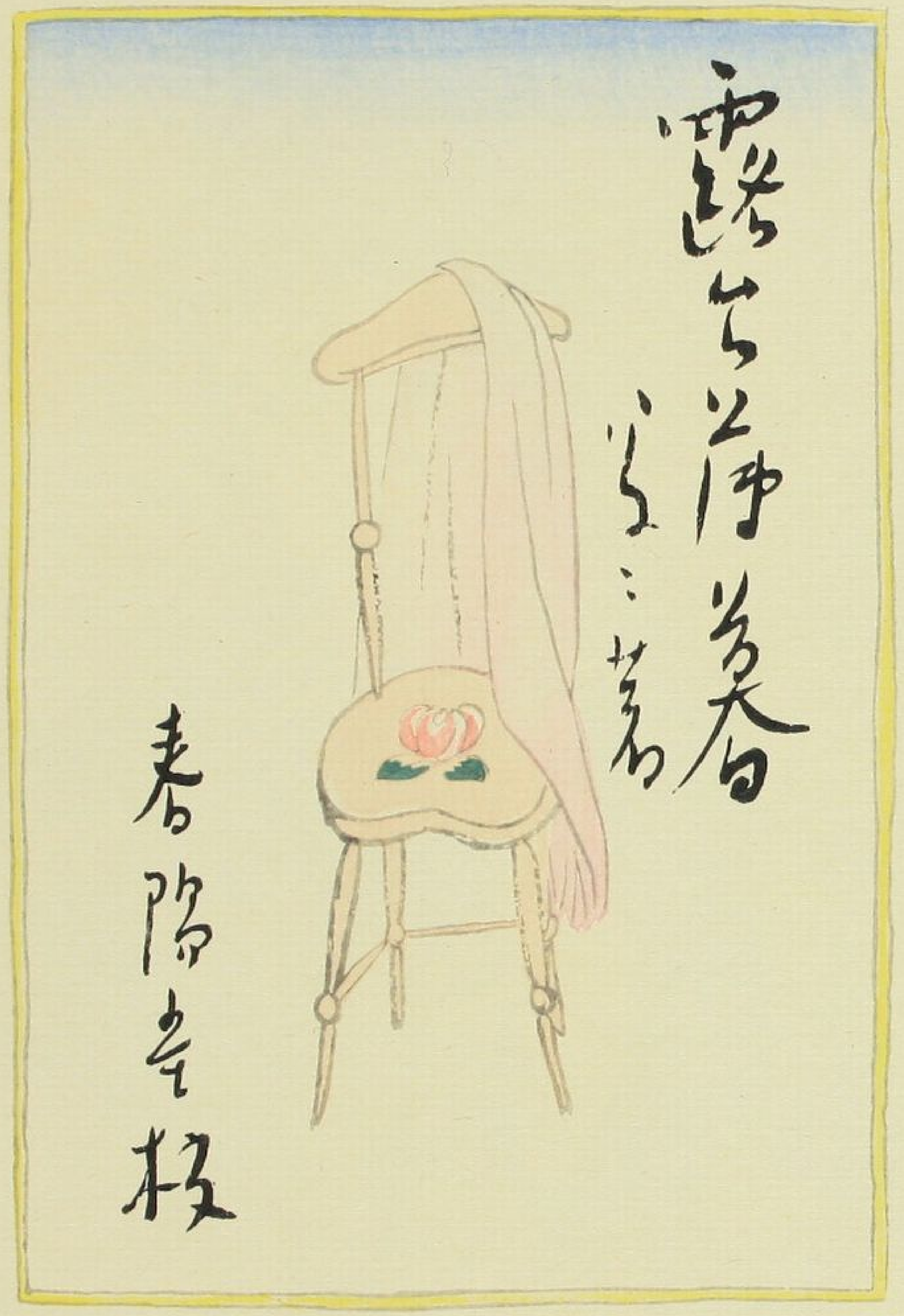
竹久夢二著

露臺薄暮・竹久夢二


ALLEGRETTO ASSAI
CHIMATA NO YUKI
MACHINO CHIMATANI FURU
YUKIWA KI E TEWA
TUMORI TUMORI TEWA
HAKANA GOKORO GAMIWO
OTOSHI YURUWA YORUTOTE
UTA IMENO HIZANINAM
DAWO KOBOSU YUGU RE

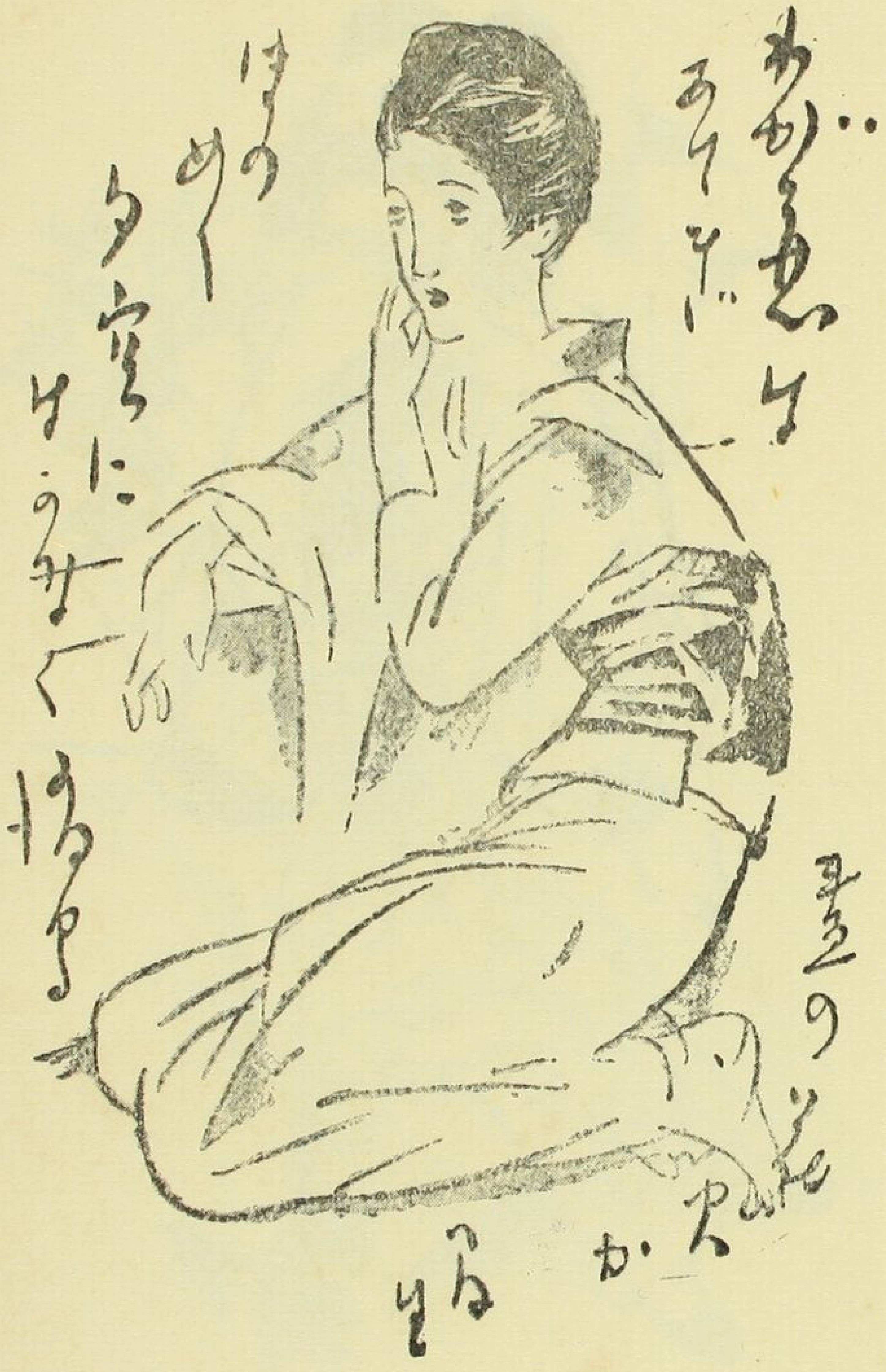

ANDANTE
KUSA NO YUME
BY YUMEZI
TO KI TE KI
E YUKI TSUYU NA RA BA KO
I MOWA SURE TEARISHI MO
NO OMOI MIDARURUHI
TONOKOWA NAGARE NO
KISHINOSHINONO MENIHI
RUWAHIRU TOTEKUSA NO

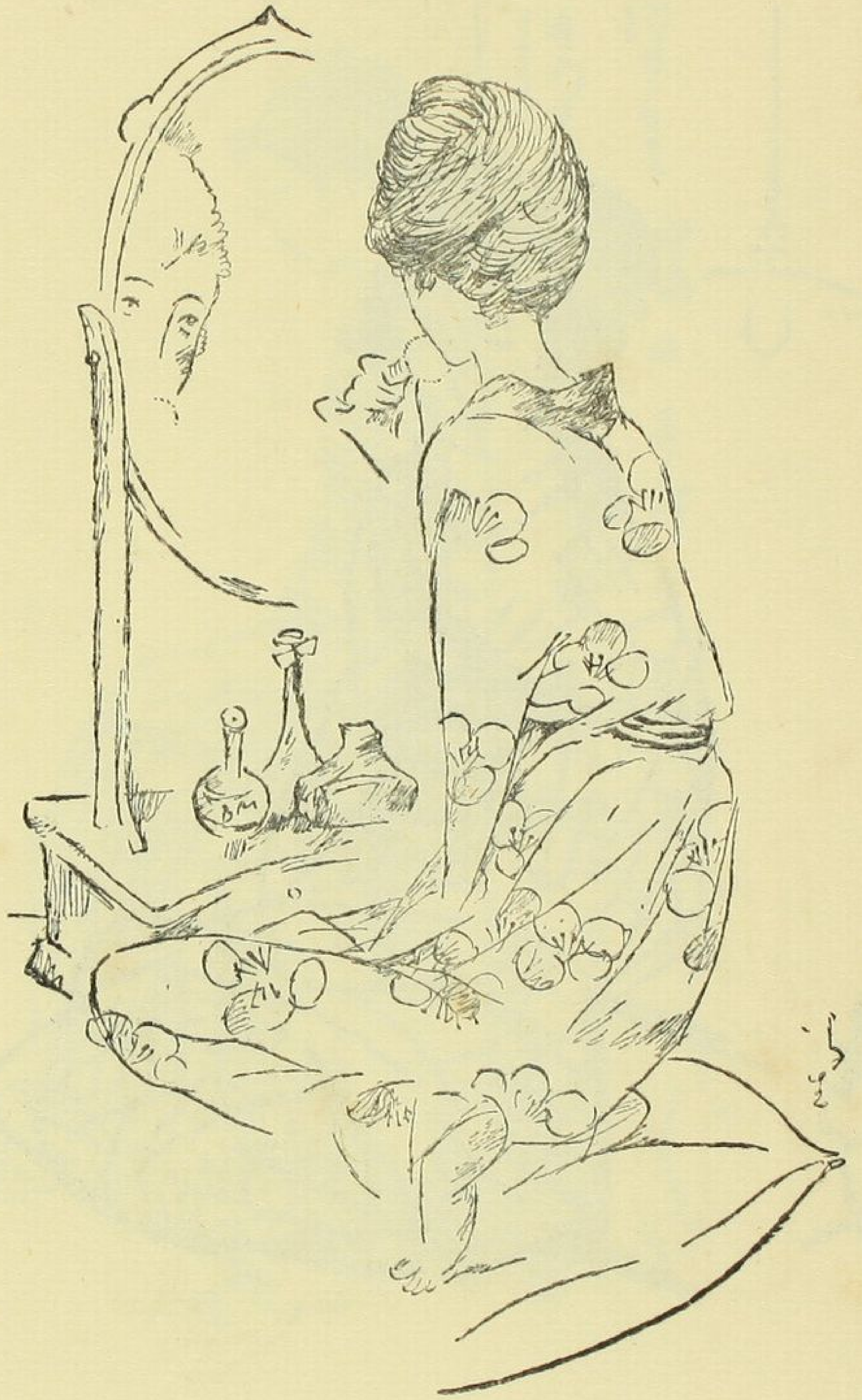
春陽堂板



1927

1927





本のはじめに

この本は先に出した「夜の露臺」に、比較的最近の詩と散文とを添へて、改版したものです。最も古い作と最も新しい作との間には、二十年に近い月日が流れてゐます。大凡そこの本の讀者と、この本の年齢がおなじなわけです。この「春の贈物」をあなたのもとへ贈るにつけ感慨深いものがあります。

著者

春の來る道

この一篇を序文として
この稚い物語へ添へる。

少年時代を私は田舍で過した。瀬戸内海に沿うた、田と畑との起伏した間を點綴した村落の一つで、冬が來ても人間を屋内に閉ぢこめるほど深い雪も降らないが、西北の方向から理窟つぽい空風の吹いてくるやうな村だつた。

　影になるもんは、傘小僧、破いてすてよ。

日だまりの壁に寄りかゝつて學校へ通ふ子供達は、一部落の生徒が集つてくるのを待つために、日向ぼつこをしながらこんな風に唄つた。

　舊暦の正月が過ぎて二月になると、畠を越えて、村から村へ續く花崗質の白い道をこちらへやつてくる太鼓の音を待つのだ。

　そら春が來た！

　子供達はさう感じるのだつた。それは越後の國から、毎年この季節にきまつてやつてくる角兵衞獅子の親子連だ。赤や青や黄の鳥の毛の獅子頭をひらひらさせながら、笛と太鼓の先ぶれといつしよにやつてきた。姉が稽古してゐた「越後獅子」の唄の文句の「おのが妻を花と見て」といふ、あの獅子に違ひなかつた。

　それが子供に春を知らせる斥候兵だつた。梅が咲くとか、猫柳が光るとか、鶯が鳴くとかいふ自然の推移に子供は無關心なものだ。春とは――子供にとつて春と秋とかいふ概念は實はないのだが――あの白い生きものゝやうに地球を廻る道をだんだんに歩いてくるものだつた。約束した季節がくるのではなくて、あの道を角兵衞獅子がやつてくることがすなはち春だつた。

あらゆる人生も季節もあの道からやつてきた。夏には寒氷とこの地方で呼ぶ氷賣りが街の方から、年にたつた一度やつてきた。麥秋の頃には、伊勢の大神樂がきた。冬になるときまつて阿波の國から青い頭巾をかぶつた人形使や、大阪下りの緞帳芝居の一行がきて、晴天三日間うつてゐたものだ。

子供達は待つた。午後五時半に、約束した人を東京驛で待ちうける心持とは全く趣きの異つた心持で、あの道からくるものを、おぼろげに待つた。

その頃の習はしで、子供は月代を剃らねばならなかつた。祖母は剃刀をとりあげて私を押へつけた。二週間前にも痛かつたやうに、今日もきつと痛いことを、私は知つてゐた。私はもはやのつぴきならぬことをも知つてゐた。それでも泣かずにはゐられないのだつた。すると祖母はきつとかういふのだ。

「ほら御覽、あすこの山道を唐獅子が飛んでくるよ、見ておいでほらほら」

私は涙の眼をあげて剃刀を持つた手で指す方を見る。それが痛さをまぎらせる手管だと知つたのは、ずつと後のことでもはや月代を剃る必要がなくなつた年頃だつた。自分の眼を信じることよりも、祖母の指す唐獅子を見つけることに、心はすつかり奪はれて終ふのだつた。唐獅子が飛んでゐるともゐないとも、見きはめがつかないうちに、頭はくるりと剃られてゐた。欺かれてゐることは少しも考へようとせずに、ただあの道をくるものをいつまでもいつまでも待つてゐた。

この一二年、まだ武藏野の面影を充分に殘してゐるこの村に住むやうになつて、また私の中に、あの道からくるものを待ちまうける心が歸つてきた。

東京の街へ出るために、電車の停留場までゆく道が、畠の中をぬけて、丘をのぼつて森の傍を通つてゐる。私のものを書いたり、寐起きしたりする窓からその小徑は見わたせるやうになつてゐる。

いまはもう、この道を唐獅子がくるとも思はないし、また幸福な人生が訪れようとも夢みはしないが、夕靄のふかく立ちこめた夕方など、街の方から歸つてくると、ま

だ頬にあたる風は冷いのに、靴の底に感じる土の肌ざはりに、もう春だなと驚く。それはあすふあるとこんくりいとの道を歩いた足には、全く新しい懐郷の感覚に他(ほか)ならぬ。またさういふ季節がやがて來ようとしてゐる。

試みに去年の花日記を出して見る。

一月二日。すとをぶの煙を見にいでしに、白梅五五輪咲きけり。

同　十日。紅梅さく。

同十七日。そふあを畫室にいるゝ窓をあけたるに、金縷梅(まんさく)のおどけて咲けるを見る。

同二十日。山茱萸(さんしゆゆ)つぼむ。

同二十三日。麥三寸の畑の道をのぼりて訪ねし人の「汗が出た」といへり。

同二十五日。夕方より風すこしさむし。

春の頁

詩集「春のみつぎ」の序詩

花はつめども
わがこころ
うつむきがちに
なりにけり。

誰におくらむ
花束か
しらずも面の
片ほてり

はかなきことを
おもふまに
花はしぼみて
夕づきにけり。

春の夜の髪

春の夜の
心にすこしかかるもの
ひとすぢのこる黒髪か
わすらるる身のいとしさか。
「夜は夜とて
晝は晝ゆゑ
くろかみの

いたづらに
みだれそめしか」
よみすてし文殻なるか
春の夜の
心にすこしおもきもの。

春の夜の青き窓かけゆれやまず
君ならざれば春のといきか

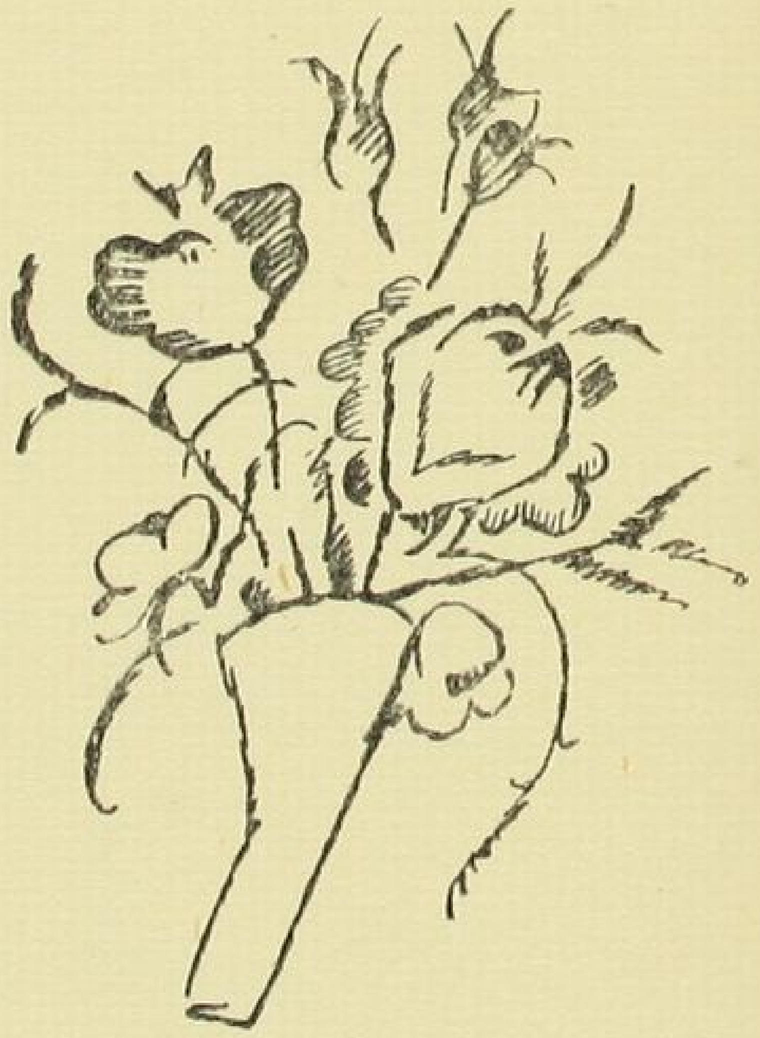
忘れた手套

それは星の降るやうな
五月の宵のことだつた。
エデンの園の長椅子に
青い手套を忘れてきた。
むかしも空はうつくしかつた。
むかしの人もやさしかつた。
だが、もうむかしのことだ。

あの時、帽子にさした
（幸福のしるし）である。
青い花はもう
枯れて黒ずむでしまつた。
若い娘さんたち
あなたがたのなかで
もしやわたしの青い手套を
見つけた人があつたら言つて下さい。

ゆびきり

約束もしないのに
燕はきました。
ゆびきりをしたのに
あの人はきません。
夏のあさづき。



月日

月日は流れ身は流れ
かけた望も約束も
流のひまに忘れつつ。

月日は流れ身は流れ
きのふの人もこの人も
流のひまに忘れつつ。

月日は流れ身は流れ
はた悲も歡(よろこび)も
流のひまに忘れつつ。

神の名にかけ願ひし
身はひとつ
去年の五月ことしの五月。

幸福の日に

あなたのために
窓をあけ
あなたのために
窓をとぢ
綠の部屋の
卓のへに
「青い花」を

さしませう。
あなたのために
窓をあけ
あなたのために
窓をしめ
綠の窓の
日あたりに
「青い小鳥」を
かひませう。

言葉

いつか忘れてゐた言葉
あなたが拾つて持つてゐた
いくねんまへの
春だつた。

さんた・まりあ

詩集「戀の横顔」のたいとるに誌す。

わたしの本よ
はやくあのひとのところへゆけ。

序詩

さんた・まりあのえりあしに
黒子のなきぞうらみなる
わが戀人の横顔の
まりあに背ぬぞかなしかり。
わがもなりざをみぬ宵は
月も出窓に
ただに白かり。

童話二篇

1

留吉は貧乏な繪描でありました。どうかすると明日食べるパンもないほど困つてゐました。それでも留吉は自分の仕事をする元氣は失はないでゐました。しかしそんなに貧乏だつたものですからお嫁さんにきてくれる女も、モデルになつてやらうといふ女もないのには困つてゐました。

毎日街へ出かけていつては、繪の材料になるやうな美しい人を眼でさがしてゐました。しかしどうかするとお腹が減つてゐるので、往來を歩いてゆく美しい人も眼に入らないほど眼まひがすることがありました。

ちやうどそんなやうな時でした。留吉は眼をあけてゐながら何も見てゐないでぼんやり歩いてゐました。するとどうしたはずみか破れた靴のうへから留吉の足をいやといふほど踏みつけたものがありました。留吉は眼をあいて足をふんだ人を見ました。それはそれは眼のさめるやうな美しい女の人でした。その人は氣の毒さうに留吉にいひわけをしました。

「御免遊ばせ、つひせうういんどの方ばかり見てゐたものですから、ほんたうにお痛かつたでせう」

さういはれると、留吉の顔は眞赤になりました。留吉はやつと

「いいえおくさん、ぼくは平氣です。おかげであなたのやうな美しい人を見ることが出來、そのうへ自分に足があることを思ひ出させて下さつたことをお禮申したいほどです」といひました。

2

留吉の南隣に竹藪がありました。冬になると竹がのびて留吉の仕事場の屋根へおつかぶさつて、どんなお天氣のよい日でも留吉は太陽の顔を見ることは出來ませんでした。「こんなはずではなかつた」と留吉は考へましたが、なんしろ太陽が空の眞中を通つてゐる夏のことで、留吉がこの家を見にきた時は、太陽が屋敷中を照らしてゐたのです。留吉が越してくると、太陽はだんだん南の方へいつて、冬になると太陽はすつかり藪の向う側を通るやうなことになつてしまつたのです。どこでも孟宗竹は頭を切つておくことを留吉は知つてゐましたから

「勇吉つさん、竹の頭を切つた方が竹のためにもいいぢやないか、そしたらすこしはぼくの家も日があたるとおもふがね」と隣の勇吉にたのんでみました。勇吉はよくあるやうなつむじまがりの百姓で、毎日ぶらぶらしながら貧乏してゐる留吉を馬鹿に

してゐましたから「おれの竹をおれが伐らうと伐るまいと勝手ぢやねえか、よけいなことを考へるひまに木偶の坊でも畫くがいいやな」といひました。これはどうもやさしく言つたのでは駄目だと留吉は考へました。それにある日、留吉の友達がきて「こりやひどいや、境の垣根から三尺こちらへ入つた植物は勝手に伐つてもいいつて規定があるんだよ。お前がお人よしだから百姓になめられてゐるんだ」といひました。そこで留吉は勇氣を出してある日のことときりだしました。

「やい、伐らなきや伐らないでおれの方で伐つてやるぞ、ちやんと法律の本にあるんだつていふぞ」といつてやりました。すると勇吉はすこしも驚かないで

「ふうん、この村にやそんな法律なんか通用しねえ、おいらの竹にちよつとでもさはつて見ろ半殺しにしてやるからよ」と留吉をおどかしました。

留吉は、その時きりもう何もいはないで、日のあたらない仕事場で外套をきてふるへながらぼんやりしてゐました。

野菊

—日記斷章—

露臺の下にあつたぐみの木を藤と植ゑかへて、畫室の北の窓の下へ移した。ぐみはすぐ紅い實を鈴なりにつけた。ある日窓の下で足音がするので、窓をあけると、百姓の子供がぐみの實を採りに、いま自然木の垣根をもぐつて入つて來る所だつた。

「いけない！」

私はいきなりどなつた。轉げるやうに逃げて行く、五歳ばかりの男の子と八つほどの女の子の後姿を見て私は寂しくなつた。子供等はぐみの實をどんなに欲しがつてゐるか、そしてどんなに盜みたいといふ心持を感じてゐるのかを私は考へて見た。

「みんなきて好いよ、ぐみの實をあげるよ」私はよんだ。さつきの子供等と十三ばかりの隣の女の子と赤坊と、一直線に庭を過ぎつて入つて來た。一度にすつかり與つてしまふつもりで、私が戸口から廻つてゆく間に、ことしはじめて芽を出した萩が、さんざんに踏みにじられてゐるのを見た。私は言つた。

「おやおや、こんなに、ほら萩の芽をふんだね。大切な萩なんだよ、これは」

「さうを、こんな萩いくらでも山にあるわよ、をぢさん」十三の子はさう言ふのだ。

「山にあつたつて、をぢさんのとこのぢやないからね」

「をぢさんあとでとつてきてあげるわ」

「さうかい、それぢやとつてきておくれ。ぐみもそんなに枝を折らないで實だけとつてくれ、植木は大切なんだからね」

私は毎朝、萩が新しい芽をふくかどうかを見てゐた。隣の女の子もときどき、それを見てゐた。しかし萩は持つてきてくれなかつた。するとある夕方、庭にゐる私に

「をぢさんこの間はありがたう」

さう言つて隣の女の子は、わたしの足許へ一株の野菊をおいていつた。

砂文字

さあ、思出すとなるとなかなか大變です。なんしろ隨分もう遠い昔のことだから。昔のことでも結構ですつて？

まづ、その頃はあんまり人のゆかなかつたある邊土(へんど)の濱邊を想像して下さい。燈臺のある岬と金毘羅樣の鳥居の立つてゐる岬とに抱かれた入江(いりえ)でした。そこにわたし達の砂丘がありました。寢轉ぶに好い砂丘は、冷くもなく暖かすぎもせず、まことに程よいくつしよんでしたよ。

かの濱に斑瑰(はまなす)の花咲いてそろ琴も上手になりて候

と、歌のやうなものを書いて、その濱の別莊から東京の私の宿へ、その人は手紙をよこしました。私は手にしたぶらしのかはりに、すてつきを持つて出かけました。五時

間汽車にゆられて、そのわたし達の砂丘へつきました。

その人はたいそう喜んでわたしを迎へてくれるのですが、ひとこともものを言はないのです。海のやうに深いうるんだ眼で、私の眼をぢつと見つめるのです。

何んて不思議な戀だつたでせう。夏、秋、冬、春、夏、秋、春と足かけ三年の間、その人は「いいえ」とか「ええ」とかを數へるほど言つたきりだつたのです。私の方からきくことにだけ、たつたそれだけ答へるのです。しかしその人は啞でも聾でもなかつたのです。私の方でも聲を出すのが不自然なので、手帖へ書いたり、砂の土や、ある時はその人の掌(て)の平へ、電信のやうに書いたものです。

シニタイトオモヒマスカ

オナカガスキマシタカ

ノンキダカラフトリマシタネ

イツユクノデス。等々。

第一問には默つてゐました。第二問にはただ笑つてゐました。第三問では袂で胸を抱いて眉根をよせて見せました。第四問は結婚問題なのですが「スグニ」と書いて答へたとおもひます。こんなことを書くやうになつてから、私たちの逢ふ日はまもなく終りを告げました。

砂の上にこぼした涙も書いた文字も月日も、波がきてさらつていつてしまひました。

ある春の終りの雲の多い日のことでした。わたしが、砂の上にサヨナラと書いたらそのひとは何も答へないで、涙のたまつた眼でぢつと私を見ました。

東京へ歸つて三日目に、わたしは、その人の手紙を受取りました。それには何も書かない白紙が一枚入つてゐました。それが最後の手紙だつたのです。

女郎花

「あなたのほめた女郎花
今日も今日とて見にきたに
うらの河原へ見にきたに」

かの處女(をとめ)かく書きぬ。

「都に遠い田舎の河原であなたに見出され、あなたにほめら

れた女郎花は、昨日のやうに咲いてをりますけれど、すべては昨日のやうではございません。 わたしも。 あなたも。 あなたは遠い都の方へ歸つておしまひになりました。 そしてあたしは………」

昨日の處女の書きけるは。

「あなたにほめられたのは、わたしではなく、女郎花でした。それでも、あたしはうれしい。 その時から女郎花をかはゆくなりました。

きのふの河原にけふもきて
あなたとよんで泣きました。」

露臺の雨

けさは露臺に雨がふる。
ゆうべのままで殘された
露臺のうへの椅子二つ
ゆうべのひとがかけたまま
しづかに雨にふられつつ。

ゆうべ露臺にゐたひとは
けふは野を越え山を越え
遠い野末の松の枝（え）に
ぬれた外套（うはぎ）をほしてやら。
けさは露臺に雨がふる。

（ある侘びた港の娘の歌へる）

あけくれ

忘れたり。
思ひ出したり。
思ひつめたり。
思ひ捨てたり。

古風な戀

あなたを忘れる手だてといへば
あなたに逢つてゐる時ばかり。
逢へばなんでもない日のやうに。
靜かな氣持でゐられるものを。

綾絲手鞠

ある宵に
妹の愛(め)でにし綾糸手鞠(あやいとてまり)
草原になくしつる。

泣く妹をすかしつつ
草原をとめしかど
ゆくへもわかず

せむもなく慰めかねつ。

月日(つきひ)は流れ
妹は母となり
そのかみの綾糸手鞠
いまはた遠く忘れつつ。

櫛ひき

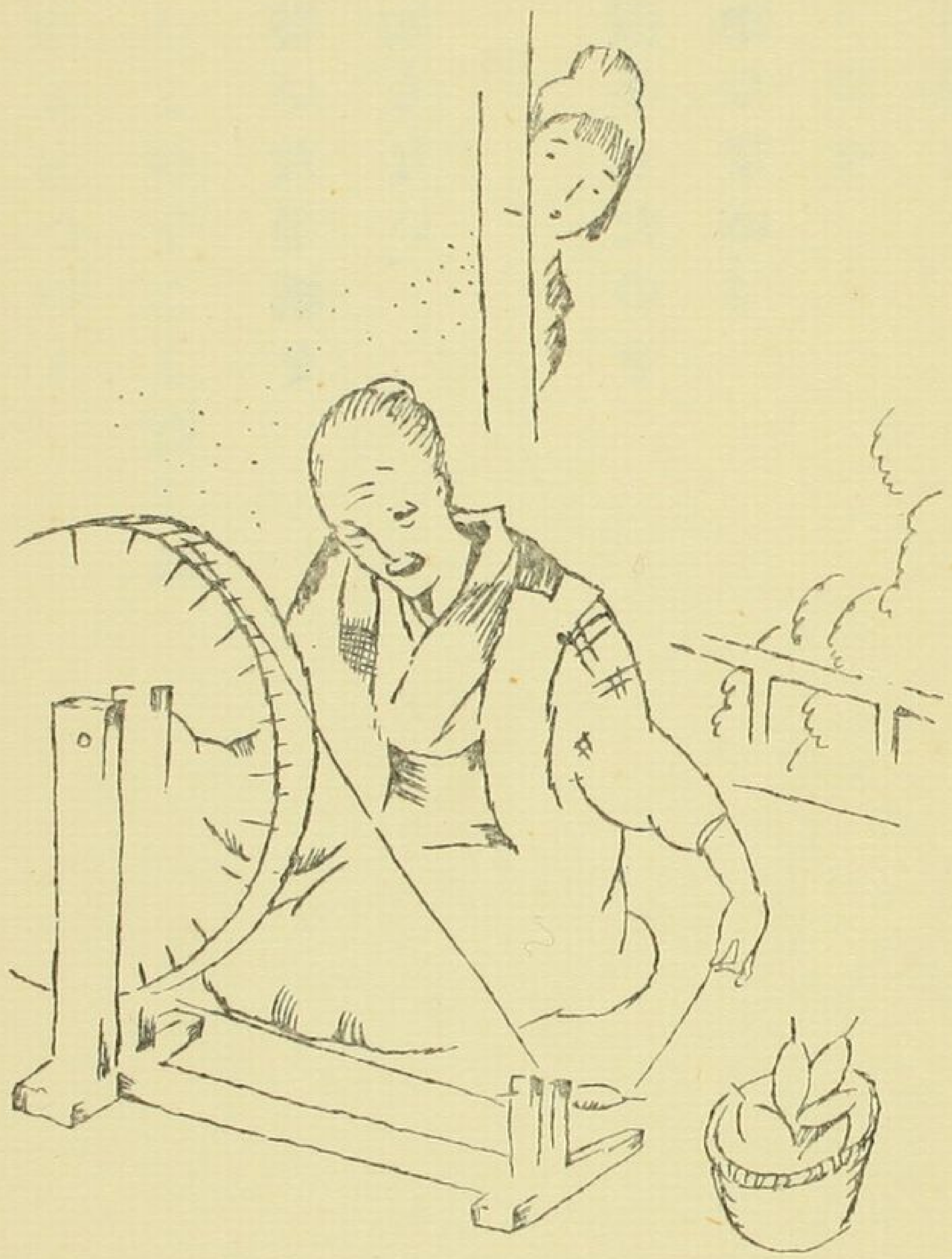
鼈甲（べつかふ）の櫛（くし）をつくると
ちんからかん。
たをやめの
櫛（くし）をつくると
ちんからかん。
雨のふる日も
ちんからかん。

紅ほほづき

妹がつまぐる紅ほほづきを
いはれなく破りすてつつ
二人して泣きいでぬ。
わけはしらずただかなしさに。

春日小景

さんらんと
春のひかりの
そそぐ木の間に
吾妹子は
いつしんに
赤き絲とる
青き絲とる。



手

右の手が書いた手紙を
左の手は知らない。

右の手が握手したのを
左の手は知らない。

だが

左の手の指輪が
何を意味したか
右の手は知つてゐる。

かならずと
またこの子にも盟しぬ
きのふにつづく
あすならなくに

寢床

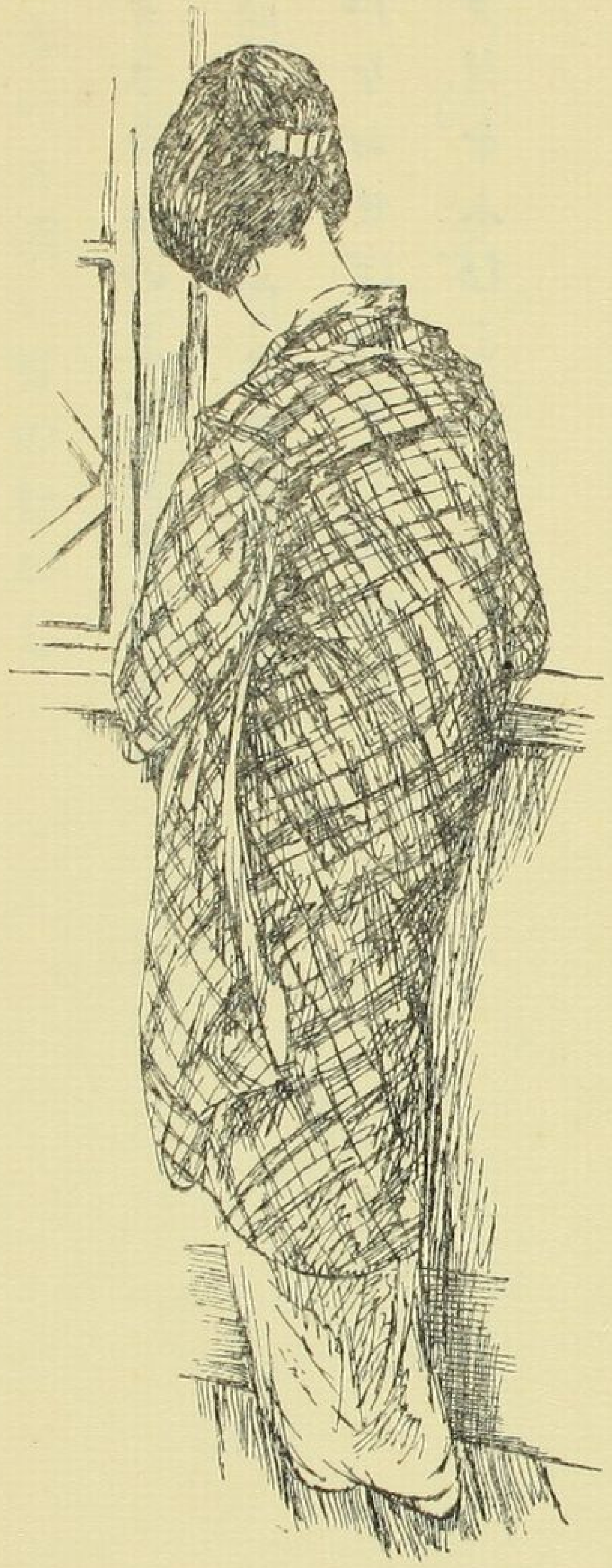
白きふし床に
聖く寂しく横はる
性はわびしく
遺傳はかなし。

されど健かに
聖くし寂しく

逢ふ日まであらむ。
かく思ひさだめて
ふかく睡れる
夜の床の
性はわびしく
遺傳はかなし。

垣根

ただお友達になつて遊びませうね。
お友達の垣根を越えないやうに
さうでないと。
別れる時が辛いんですもの。



冬のけしき

オスラムのうすらあかりに
ひとのいふことのつれなさ
戸をおせば白ききざはし
夕月をふむこころもとなさ。

蛛の巣の
　樂譜にかかる病葉の

ドレミ　ファ　ソ　ラ　シ　ド
たれゆゑのなみだぞも。

街の子

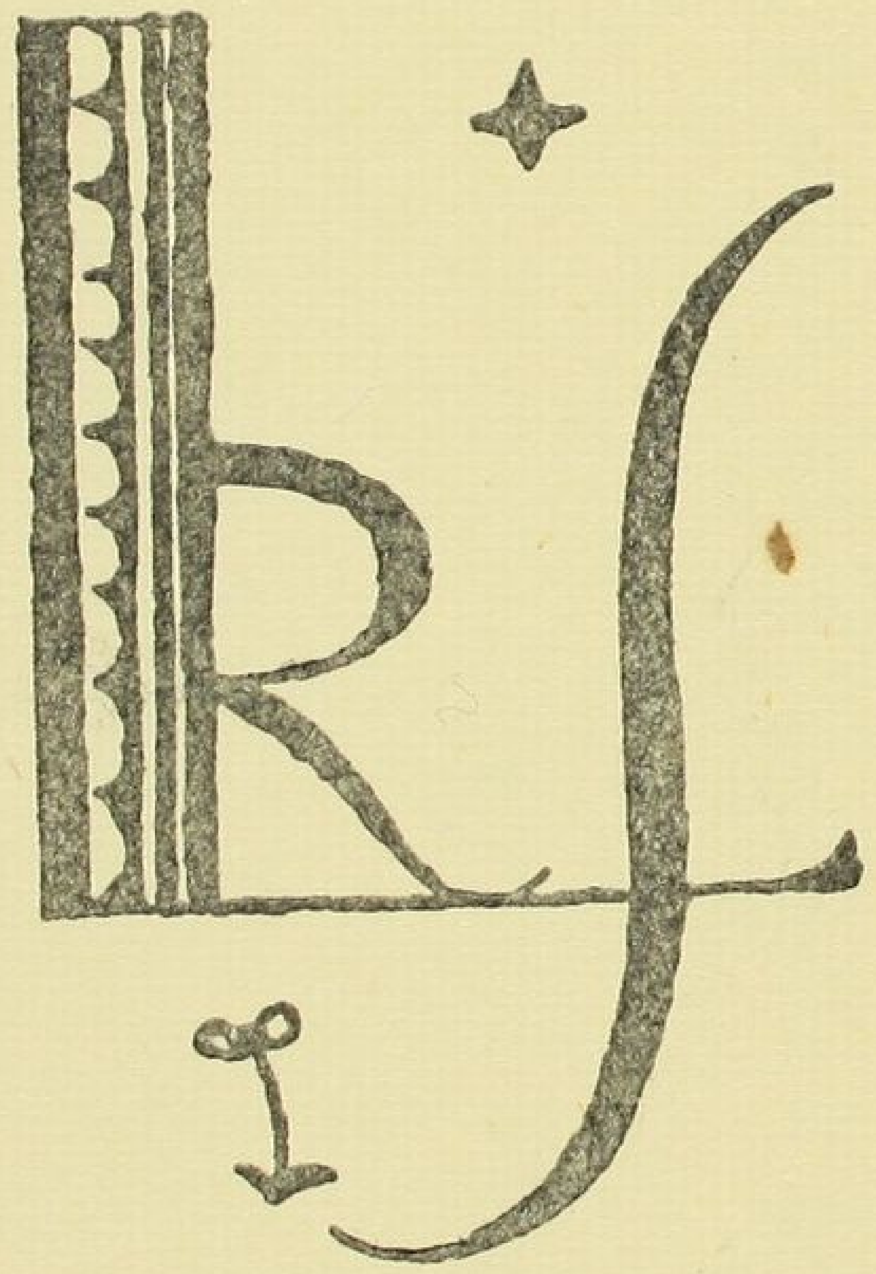
きのふ別れたおみなかや。
をととひ別れたおみなかや
いえいえ遠い日のむかし
おみなは街の子になつた。

赤い灯のつく街の子に
青い酒のむ街の子に
あの街東へいつたとて
この街南へいつたとて
おみなは街の子になつた。

貧しさが
彼女を街へ追ひやりぬ
若さが
すぐに身をおとしめぬ

朝

ルイザの窓の
駒鳥は
みどりの朝の
日をうけて
ルイザのために



うたへども。
わたしのルイザは
お眼ざめか
蕾のやうに
眼をとぢて
白いベッドの
夢のなか。
ルイザの窓の
駒鳥は
こころしてなけ

しづやかに
わたしのルイザの
さめぬがに。

綠の原

S子とN子とは、大の仲よしだつたものですから、いつもお揃ひのリボンをかけました。

野原へ出て、二人が駈けだすと、二つの蝴蝶が遊んでゐるやうに見えました。

「さ、もつと走らない」

「え、走るわ」

「もつと、もつと」

「もつとね」

駈けたり、寐ころんだり、デセールを食べたり、本を讀んだり、歌つたり、踊つたり、いくらしても二人は、あきることを知らないほど、それは樂しいのでした。

太陽は幸福な少女達の遊んでゐる、綠の原の方へ、美しい光をなげてやりました。

忘れ得ぬ少女

こゝで忘れ得ぬ少女といふのは、折にふれて思出すほどの記憶で、慌しい生活の暇も忘れずに思ひつゞけてゐるといふのではない。

その頃評判だつた新しい劇團が、最初の旅興行をした時の事だから、それはもう五年も前のことです。北海道の方の長い巡業の旅を終へて、一行が海岸線のK市へ辿りついた夜の事でした。その年もはや暮に近い十一月で、冬の早い北國の遠い山々にはもう雪が降りてゐました。

私は旅行の途次はからずこの劇團とS市で落合つたので、その晩はこの座のまねぢやあであつたS先生と一座のぷりまどんなるS子と先生の宿で夜更けるまで遊んだ

ことでした。(S先生もS子も相前後して亡くなつて今はこの記憶だけが殘つてゐる。)

それは夜のもう二時頃でもあつたらう。私は先生の室を辭してS先生が取つてくれられた私の室へ歸る途中、廊下の突當りの部屋のまへまでくると、障子が半分明いてそこには一座の最も年若な女優K子が一人でとらんくのまへに坐つてゐました。

古い小形のとらんくと柳行李を前にして悄然とうなだれてゐるK子の姿は、五燭の電燈の光をうへから浴びて、髮の影が顔の上半分を暗くして襟足と肩とが濁つた淡黄なはいらいとをうけて、世にもいたましい、これほど、しょんぼりとした、いたいたしい姿を、私は曾て見たことはないとさへ思ひました。

K子は良家の處女としてある女學校を卒業した。その切勃興した新しい氣運に動かされ家庭を捨てゝ學校からすぐにこの劇團へ投じた一人であつたが、音樂の素養があつた上に、らぶりいな素直な性質が「思出」のけていとか「埋れた春」のお君に適つて居たやうに一座の誰彼にも愛せられてゐました。

K子は私を見ると、顔をあげて默つて笑つて見せた。その微笑には思ひ屈した放心から自分を取返した瞬間の表情と、私に何かもの言ひたげな表情とがありました。

しかし彼女は私がそこへ坐るか坐らないうちに、

「私、今夜東京へ歸りますのよ」と言つた。

私はとらんくや疊みかけた羽織や、女の持物らしい紅色の多い帶揚や、花やかなしようるなどを、却つて寂しいものにおもひました。

「ここではもう芝居しないで？」

「ええ」

「先生もS子さんも困るでせう、こゝで君に往つてしまはれたら」

「ええ……でも」

K子はさう言つて、影の深い顔でまともに私を見た。「何故」と私が訊るのを待つやうな、もしさう訊かれたら答へるのに困るやうな表情で私を見た。

それで私は「何故」とは訊かずに
「また何だつてこんな夜中に歸るのさ」ときいて見た。
「今夜つて言つたつて、もう今日よ。朝の五時にたつた汽車があります。………だつて、あたし東京へ歸りたくなつたんですもの」
さう言つて、K子は眼を伏せて膝の上で疊みかけの伊達卷帶を丸めたり解いたりしてゐます。
私の好奇心は「何故」にこだはつたが、立入つてK子の傷ついた心に觸れるのを好まなかつた。K子の口から一座の誰彼の私行を聞かされたくもなかつたので、默つてゐた。
あたりはもう寢靜まつて、外は雪でも降つてゐるかと思はれるやうな音のない音が、家を包んでゐるのを感じながら、私は煙草に火をつけた。
何といふ物寂しいたゝずまひだらう。K子も默つて白い細い指で、紅と銀鼠色の伊

達卷を、丸めたり解いたりしてゐる。
S先生からもS子からも聞いてゐないが、K子がかうして一座をはづして急に東京へ歸るに就ては、相當の理由と事情があつての事であらう。いつもあの快濶なK子が悄然としたこの姿は何といふ痛々しさだらう。しかし私はS先生の知人として樂屋で時折顏を合せる外、彼女のお友達でさへなかつた。だから、この夜の寂しさ——彼女の悲しみと言つた方が適當であつたかも知れないが、その夜の寂しさを分つ術もなかつた。彼女はいま私がこゝに坐つてゐることに當惑してゐるのではないかしらとも思つたので、
「もう荷造りはすんだの」ときいて、それをしほに私は立上らうとしてゐた。その時、遠く、停車場のあたりで汽笛がポーと鳴つた。彼女は驚いたやうに顏をあげて、かう訊いた。
「幾時でせうか」

「二時卅五分」

私は時計をぼけつとへしまつてから言つた。

「まだ……二時間半あるのね」

「少しでも寢たら好いでせう。僕は失禮するから」

「さう………」

私が立上つたのを見て、彼女はとがめるやうな、また世にもたよりない寂しい眼で私を見上げた。それは、私にもつとかうしてゐてほしいが、それを强て求めるだけの勇氣さへないほど、彼女つ心は虐げられてゐるやうに見えた。

彼女は獨語のやうに言つた。

「あたし、寢ないでゐるの」

「そりやいけない、ちよつとでも横になると好い。ぢや、さやならおやすみ」

さう言つて、私は室を出て、外から障子をしめた。

寂寥と彼女とがしよんぼりあとに殘つた。

私は床へ入ると、旅の疲れでぐつすり寢てしまつた。眼をさましたのは十時近い頃で、彼女を乘せた汽車が、やがて武藏野を走つてゐる時分であつた。

閉された窓

忙しげにものかくひとよ
窓のそとには春がきてゐる

灰色の家の灰色の出窓は、春から閉されたまゝ開いたことがなかつた。灰色の家のあるじは、いつも暗い顔をして、書物机(かきものづくゑ)によつて何か書いてゐるが、壁にかゝつた唯一の裝飾である「太陽を抱く女」と題する浮彫(ハーフレリーフ)を、寢臺(ベツド)に横になつて眺め暮してゐるのだつた。出窓のわきの石段が、この部屋の入口になつてゐるのだつたが、戸口をのつくする訪問者はひとりもなかつた。いつか春も急ぎ足に過ぎて、出窓にからんだ蔦が大きな葉をつけて、どんどん屋根のうへまで匍ひあがつていつた。出窓についた三つの窓のうち、一つは蔦をよけて開閉(あけたて)が出來るやうになつてゐた。しかし、その一つの窓も、決して開かないことを知つてゐた小鳥どもは、安心して檜の木に巣かけてゐた。(春の小鳥に窓をあけ)小鳥は歌つた。それでも開かなかつた窓が、ある日突然あいたのです。その時窓のしたには紺の制服をきた女生徒が二十人ほどづらりと立つてゐるのに、主人は驚きました。それは近所の女學校の寄宿生で、そのうちの四五人は開放したこゝの庭へ寫眞をとりにきたり、てにすこをとへ遊びに來る女生徒だつたのです。この盛んな來訪者におどろかされた主人は、「何か用ですか」と、いきなり訊ねたほどでした。

「いいえ、ただ先生のお話をききたいのです」女生徒の一人が言ひました。

「いけません、けふはたいへん機嫌がわるいのです」主人はさう言つて、ぴしやんと窓をしめてしまひました。それからといふもの主人は、窓に押寄せる青葉の酸つぱい吐息や、太陽の光を吸つて黄ろい色葉が窓ガラスへうつるのさへ怖がつて、かあてんを深くおろして、窓は再びあかなくなりました。そして一つだけ殘したその窓をもその夏は蔦がすつかりからまつて閉ぢてしまひました。

青き繪の具

「見ずならば思はずならむ」
母の悲しきなぐさめも
おとなしくききはききつつ。
青き繪具(ゑのぐ)を野にとけば
睫毛(まつげ)のひまに草の葉の
光りこぼるる。

貧しき巷の女へ

うそとまことをくみわけて
心よいつもぬれてあれ。
眼には涙をたゝへても
こぼさぬほどに光あれ。

春のあしおと

どこかしら
白いぼうるのはずむ音
いつかしら
足音もない春がきた
隣の室へ春がきた。
なにかしら
うれしいことがあるやうに
春がわたしをのつくする。

遠い山川

人の世の
露路にはぐれたあの人に
逢ひたさに
遠い山川イスラエル
海をへだてた粉川寺
鐘ならし
鐘ならしつつゆきゆかば

世のはてに
別れた人に見ぬ人に
めぐりあふ日もあらうかと
鐘ならし
鐘ならしつつ
けふも旅ゆく。

他郷のゆふぐれ

はづかしさうな裸木が立つてゐる
わたしはうつむいて林をぬける
やはらかい落葉は故郷を思出させ
裸木の間からああなんと古風な月があがることか
ゆふぐれになればひもじくなればふるさとの母を思出す
あたたかい御飯と大根のおみおつけの匂を
黄ろい灯をうつしたゆふぐれの障子を

えぷろんで手をふきふきふき臺所を出て來る母を思ひ出す。

夢とはあと

おんなし夢をふたりして
遠いところで見たのです。
ふたりだけしか知らぬ夢。

たとへかかるたのはあとでも
ふたつに切れてはいやなもの
わたしのはあとよ傷つくな。

花牌の皇后

とらんぷの
きんぐ・くゐんもたまさかに
逢うて別れる夏の宵かな

秋の眸

秋の
青い眸（ひとみ）は
じつにしづかに
よろこびも
かなしみも
ぢつと
たたへて

ゐます。
はつ秋の
こころは
さはらないで
さはらないで
いまにも
涙が
こぼれます。

櫻の園よ さやうなら

この一篇をアアニヤに扮せる夏川靜江孃におくる。

搖籃だつたふるさとの
「櫻の園」よさやうなら。
わたしのちひさい巣であつた
昨日の家をすてませう。

遠いあなたのうた聲に
あはせるためにゆきませう。
あかつきがたの風のやう
野山を越えてゆきませう。

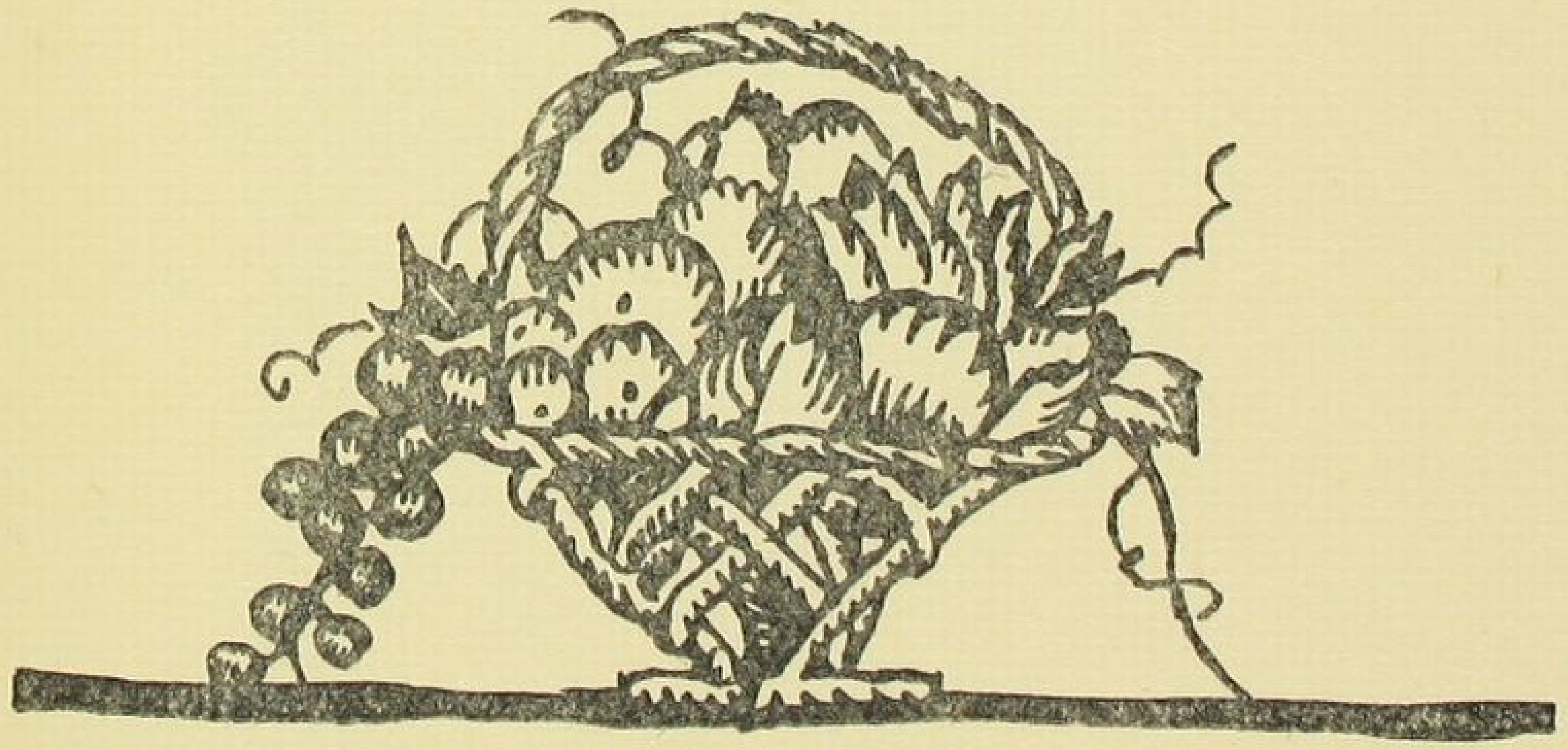
遠い野末のうすあかり
明日の家へすみませう。
そして小徑のかたはらへ
春の上着をぬぎませう。

飛ぶ春

けさ戸をいでて見渡せば
なんとあかるき野よ春よ。
かぎろひわたる蒲公英の
にこ毛をあぐる野よ春よ。
さはれさびしきわがくせの
かくしにいるる手のうちに
ふるるは遠き夜の薔薇

いまはしぼみて蟲ばめる
春はただ
恰しきものと誰が言ひし。

これやこの
らうらんさんの白猫は
ぴえろの膝にねむる
春の夜



逝く春

春の夜なれば處女ゆゑ
人の待たるる心地して
花のこかげにきはきつれ。
いざなふものは誰ならむ。

春の夜なれば花なれば
約束したる人に似て

しづ心なく散るものを。
いざなふものは何ならむ。
ああゆく春のいとしさよ。
心もとなきおぼろ夜を
口笛ふくは誰ならむ。

よろこびは
きよくはかなき夢とせよ
らうらんさんの春のゆふぐれ

窓へ

私の孤獨な窓から
ある家のたつた一つの窓を
今夜もぢつと見てゐます。
どんな人が住んでゐるのか私は知らない。
晝は桃色のカアテンを閉ざし
夜は青い灯がともる。

私が孤獨であるやうに
あすこに住んでゐる人も
寂しいのであらうか。
私は夜毎忘れずに
あの窓を見るのを
約束をしない約束のやうに守つてきた。
昨夜まだ宵の早い時
私は一時間ばかりもその窓を見てゐたら
ふつと灯が消えてしまつた。
それからいくら待つても

とうとう灯はつかなかつた。
約束をしない約束を破られたほど
果敢ないたよりないものはない。
今宵は日が暮れてそして夜が更けても
二度ともうあの青い灯はつかない
黑い家だけが空にくつきり立つてゐる。
仇なつれない心でさへも
これほどはかなく
寂しうはなかつた。

わかれ

長いレイルを見てゐるとあたしなんだか悲しくなるわ。
でもあたしまた長いレイルの向ふからあなたに逢ひにくるわよ。
どこかしら世界の果へいつてしまひたいわね。
驛のない終點のないレイルのうへをね。
客のない、あなたとふたりきりの汽車にのつて。
歸りのない、路を忘れた汽車にのつて、遠い遠い二度と歸らないところへ。

約束

明日ね。
明日になるとまたつぎの明日のことを考へるわ、ね。
明日なんていつになつても來ないのね。
明日なんて氣やすめはいやだわ。
では今日。ね、いいでしよ。
今日ぢやいや、今よ、今、今。

昨日の夢

青き小鳥は
昨日の夢の戀しさに。
青き小徑を見にゆきぬ。
青き小徑は
小石原さす影もなし。
涙ながしてかへりきぬ。

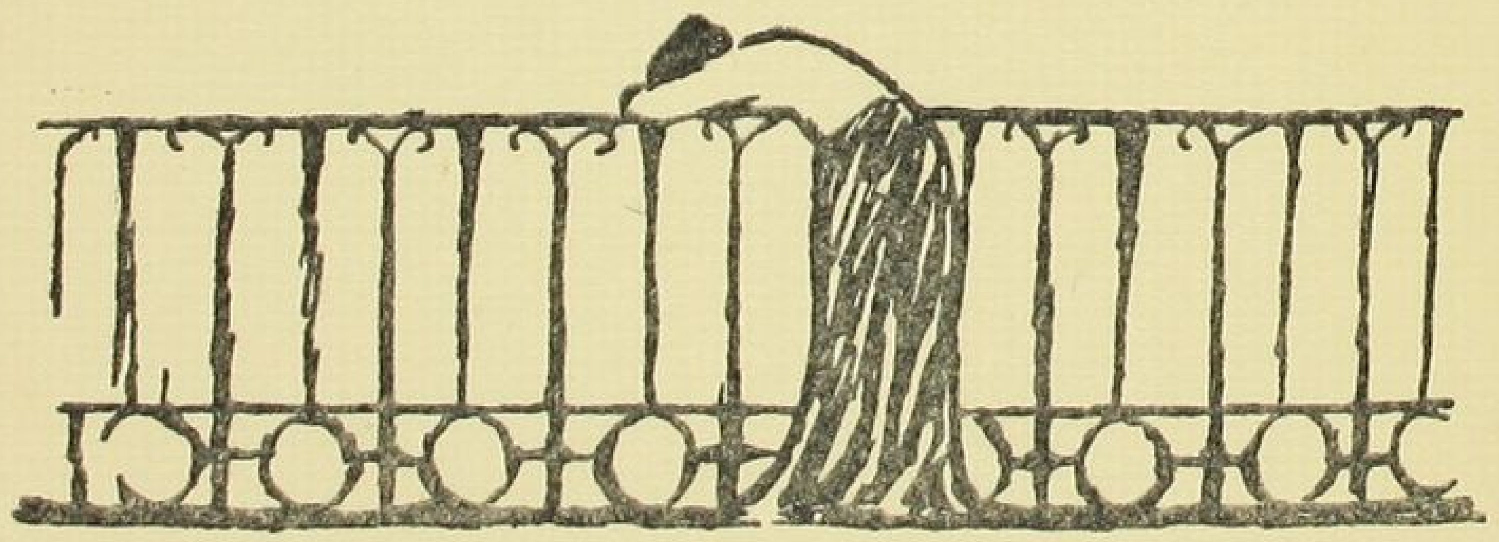
東京は戀し

以下「遠い戀人」にいたる詩篇は震災に際して書きつけしものなり。

「小鳥でさへも巣は戀し
まして青空わが國よ
生れの里のパライソウ」

（海潮音）

ふるさとなれば
東京は戀し。



銀座の宵の
さす灯はなくも
やれし築地(ついぢ)に
月てるらむを。

ふるさとなれば
東京は戀し。

「娘と人形」へよせる

娘よ。
お前は悲しくはないのか
お前の幸運の藏は
あの火の中に落ちたではないか。

娘よ。
お前は悲しくはないのか。

お前のネロ王は
不運の馬車に
お前をのせて
見知らぬ國の方へ
いま鞭をあげる所ではないか。

いやいや。
娘は人形を抱きしめて
焦げた煉瓦の上に坐つて
笑ひもせず泣きもしない。

今こそ私は知つた
お前は不幸ではないのだ。

死都哀話

ゆうべあの人が腰かけたままに
ホテルの露臺の椅子二つ。
ゆうべあの人が踊つたままに
二十五番の赤い靴。
ゆうべの歌のクロイツエルソナタは
ああまたきくよしもなし。

壁畫

ニコライのドオムの壁の
若きキリストの顏は蒼ざめ
聖マリアの胸に
泣きたまふにあらずや。
月のもるドオムの
そこはかとなく
蟋蟀の泣くにあらずや。

再生

焼跡の破れし瓶の溜り水に
甦り咲きいでし水蓮の花よ。
秋の青空水にあり。
焼跡の築地のうへに腰かけて
空を見あげる乙女よ。
秋の青空畔にあり。

赤い地圖

見渡すかぎり赤い土
東京地圖を
赤いインキで塗る男よ。
死せる都の街角の
はてしなき青空の下に。

廢園

――わが夢のふるさとへ捧ぐ――

燒野が原のこほろぎは
こほろぎは
きのふのやうに歌へども。

燒野が原のこほろぎは
こほろぎは

きいて悲しむ人もなし。

燒野が原のこほろぎは
こほろぎは
きのふのやうに歌へども。

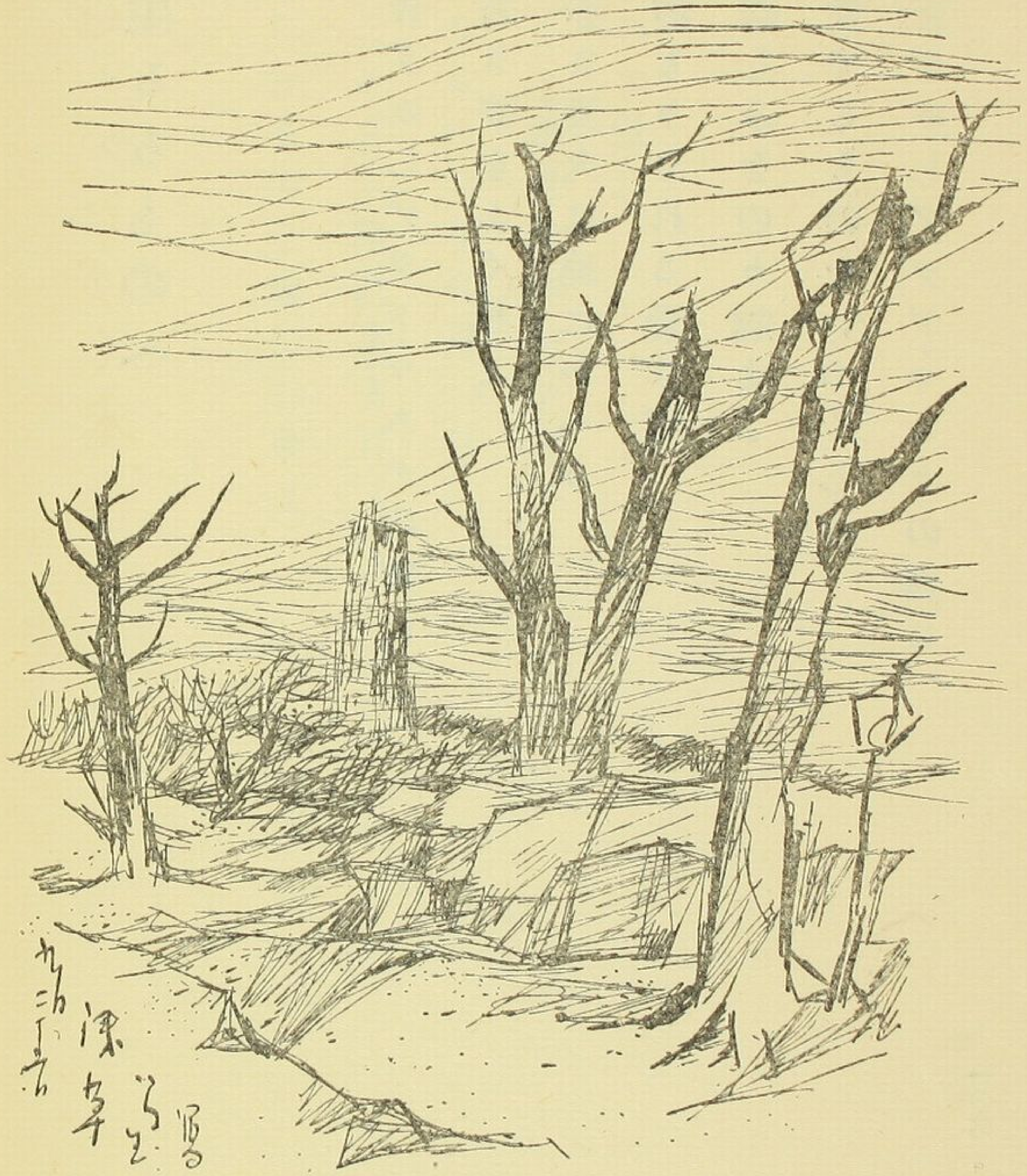
暦

破れた壁に
めくり忘れたカレンダア
いつもいつも九月一日
うごかざる時計をまけよ。
悲しむものを起たしめよ。

生るるものへ

蒼ざめしデッド・マスクの傍に。
若き芽をふく草よ。
赤き業火は地にかへり
靜もりきれる青き空。
悲しみをのり越えよ
愛するものをいつくしめ。
蒼ざめしデッド・マスクの傍に。

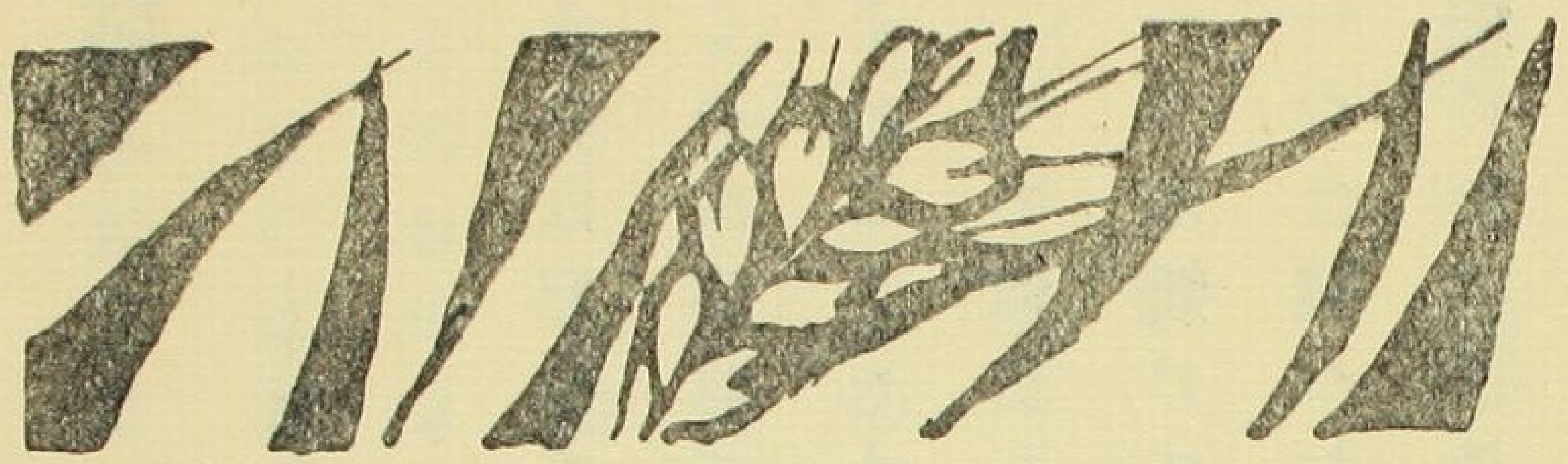
若き芽をだす草よ。



越しかたゆく末

月日は永遠の處女のごとく
昨日もあり今日もあり
また明日の日もあらむ。
ながれてやまぬものなれば
いつまでもうら若く
かぎりなく美しき。
ながれてやまぬもののながら

心ある胸にはやどり
あでやかにゐまひつつ。
ながれてやまぬものゆゑに
紅の小袖はかへすとも
忘るるままに忘れしめ。



動かぬもの

その日から
とまつたままで動かない
時計の針と悲みと。

殘つたもの

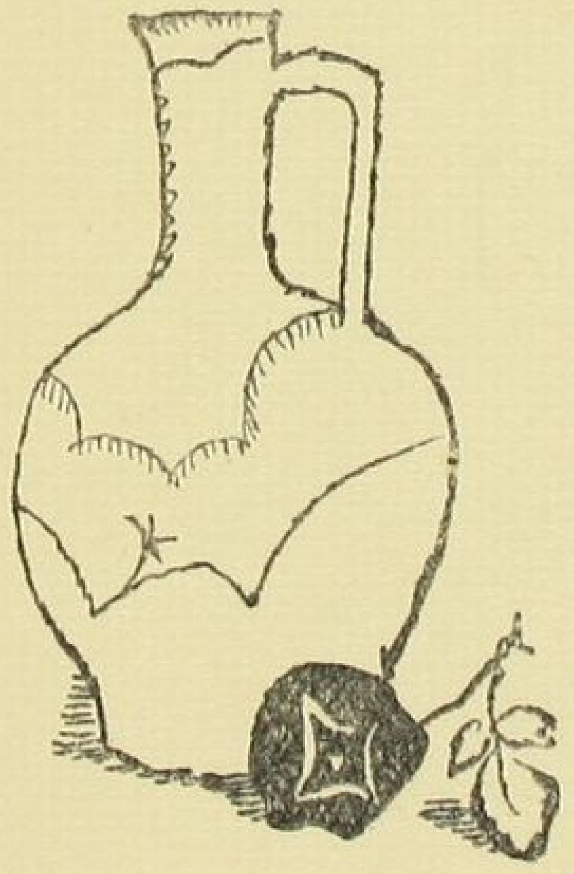
―荒都懷古―

それは忘れてよいもの
これは忘れてならぬもの
それとこれとを
二つの筥（はこ）にわけておいたに
一つは燒けて
一つは殘つた。
燒けたのはそれは忘れてならぬもの。

遠い戀人

YesともNoとも書かないで
九月一日の朝出した手紙が
あなたへの最後の手紙。
ゆくへも知らぬ私は旅人。
その日のままに
あなたは遠い。
生き死にさへも知るよしもない

遠い戀人。
Yes とも No とも
いまはいひやるすべもなく。



あの子この子

スケッチ帖のはしへ鉛筆で書いたあどれすは
いつの間にか消えてしまつた。
消えないでゐたとしても
いつまでそこに住んでゐよう。
あの人この人おもへば今更に遠い。

昔を今になすよしもかな

そこは東京の郊外
青い立木に圍まれた青い家があつた。
十月の空は晴れて雲の影一つなかつた。
千鳥の足のやうに赤い
蕎麥の畑は連なり
武藏野はひつそりと
初秋の空氣の中にひろがつてゐた。

青い家のてらすで二人の人が話してゐる。

てらすの柱から柱へ繩をひいて
そこには數々のそして種々雜多な色彩を持つた衣裳が
らいんはると一座の樂屋ほど
づらりと掛けられてゐる。
今日は青い家の土用干と見える。

一人はやつと十六になつたかと思はれる眸の深い少女だつた。
肘掛椅子に深く腰かけた男は頭も髯も眞白な老人だつた。
ぎりしや風な鼻を持つて艶の好い顏は俗にならずに
灰色の服裝と優雅なはるもにいを保つてゐる。
家族はこの二人きりと見えてほかに臺所をしてゐる
このあたりから雇はれたらしい女きりで
訪ねてくる人を見たものもなかつた。

少女は話しかけた。
『どうして爺やはその時どうして逃げなかつたの？』
『さればお孃さま爺は男でござりました』
『男といふものは强いものなのね。』
『はい〳〵、男といふものは、
止まる時には止まり行く時にはどこまで行かねばならぬものでムります』
この話は爺やと呼ばれる老人が
幾度もこの少女に話してきかせた若い日の武勇談であつた。
少女はまるで物の本にある
英雄物語のやうに幾度訊いてもあきることはなかつた。
『あなたの母上はこの青い上衣をかく裾長に召しまして』

爺やは繩にかけられた一枚の上衣をとりあげて話した。
『五層の塔をしづかに上つてゆかれました。
折からの月夜で
母上のお顔は螢をあびたやうで
不吉なやうだが青い上衣が經帷子のやうに白く風に流れて
身も世も捨てた人はこの世の人の言葉とも思はれぬ清々しい
善惡も超えたものに爺やには聞えましたよ。
『さあお引き、爺や
もう一刻も時間がない、さあ、思ひ切つて引いておくれな。』
やさしいうちにもきつとした奥さまの――あなたの母上のお言葉です
爺やめはふるへる手で鐘樓の綱を力をこめて引きましたよ。
『お母樣はそれからどうしたの？』

『されば、爺やは鐘の綱を一つ二つ三つ引いておいて
五層の塔を見あげました。
天女のやうにお母さまは
ふはふはと雲の中へ入られた
するするすると棚引く雲かと思つたが
お孃さまこれが記念の青い上衣でムります』
『お母樣は死んだの？』
『さればお亡くなりになつたものやらそのまま天國へゆかれたものやら
爺めにはとんと分りかねまする』
『お父さまはどうしたの』
『だまつて書齋に坐つておいででした。
爺やが入つてゆきますと

（爺や、何ももう言うてくれるな訊ねもしない、旅の用意をしてくれよ）
とから仰せられて、
ぢつと窓の外を見ておいででした』
『それつきりもうお父様はお帰りにならないの？』
『はい、その夜が長のお別れでござりました。
命をさしだしたものが許されても
これはどうして始末の悪いもので
爺やはまるで夢遊病者のやうにふらりふらりと廊下を歩いてきましたよ。
勿體ないことですがお嬢さまあなたの寝室の前へきて
はて、と爺やめは思ひつきました』
『あたしはどうしてた？』
『左様で、おかあさまにお抱かれになつた恰好で、
まるでお人形のやうにすやすやと眠つておいでしたよ、
蕾のやうに閉ぢた唇がいまにもあいて
（おかあさま）とお呼びになりはすまいかと爺やめは
あんな忍び足をしたことは一生にたつた一度でござりましたよ』
『お兄さまはどうしたの』
『さらばでござります。
爺めもとりこんだと見えまして
どうも旦那様と御一緒に旅へおいでになつたものか
そこの所はつきりいたしません』
『あたしお兄さまに逢ひたいわ。』
『さやうにござりませうとも。』
『ぢいや、あたし不思議なことがあるの』

『はい。』
『お父さまの、ねくたいだつたといふこの布にそりやあそつくりな
鼠に紅と紫の模様のある
ねくたいをした人を海濱ほてるのばるこにいで
たしかに見たのよ』
『して年の頃は』
『さうね、十九か二十でしよ』
『はてね、お兄さまは
たしかお孃さまより三つ上のことしお十九のはず』
『あたしお兄さまにお逢ひしたいわ。』
青年はくりいむ色の服をきて

脚を組合してのんびりと腕を手すりにおいてゐた。
青年の前には母親にしては若すぎるすこし年上の姉らしい白衣の婦人が
青年の話を熱心にきいてゐた。
青年の話は
少女の意へは聞えない。
それほど話聲は低かつた。
少女は少女の直感で青年の話がわかつた。
傍で青年の話をきいてゐるあの白衣の婦人よりも、もつとよく
青年の心まで見たやうな氣がした。
青年の話が終るまで少女は窓に立つてゐた。
白衣の婦人はぷらちなの時計を出して見た。
そして青年を促して

ばるこにいを引あげた。
青年は婦人につづいた。
少女はこの白衣の婦人を何故か憎らしい氣がした。
つぎの日の午後少女は松林の小徑を歩いてゐた。
向うから口笛をふいてくるのはたしかその青年だつた。
少女は小徑の傍へよけて
そこの草の花をつむやうなふりをした。
青年は默つてゆきすぎた。默つてゆきすぎた。
何とか言葉をかけられたら
きつと眞紅になつてしまつて何も言へなかつたもしれない。
それにも拘らず、少女は言葉を待つてゐた。
それにも拘らず、言葉はなかつた。

やはり口笛をふきならしながら
少女がそこで花をつんでゐるのも氣がつかなかつたやうな振りで
ほてるの方へいつてしまつた。

少女はそれから
毎日のやうに同じ小徑の 傍 で花をつんだ
それを誰におくるあてのない花をつんだ
花をつんでは、捨てた。
青年はそれから一度もあの松林の小徑を通らなかつた。
そしてばるこにいでも
その後決して見かけなかつた。
ばるこにいで見た青年の横顔は

いつまでもいつまでも眼について消えるひまはなかつた。

『爺や、お母様のお顔はどんなだつた？
あたしのやうな眼だつた？』

『されば、お眼もとは
黒水晶のやうで
髪は海草のやうに輝いて紫色に光つたり
夜のやうにしづかに垂れておいでしたよ。
お鼻の形なら口もとならそれはもうあなたさまにそつくりで
秋草の模様のあるあの振袖を召してお里がへりをなされた時は
恰度いまごろの季節で
爺やは馬の手綱をひいて峠の道を

しやらん、しやらんとお供をして參りましたよ。
七村の衆が道を埋めて
（まるで繪巻物のやうだ）つたと申しましたよ。』

『爺や、お母さまは
左の手の指でから帶のところを叩く癖があつたの？』

『はいはい、さやうききますと
そんな癖がたしかにあつたやうでムりますな。』

『あら、ほんと？』

少女は海濱ほてるのばるこにいで見た
あの白衣の婦人を思出した。
もしやあれが母上か、

いやいやそんなはずはない。
それにしてもあのねくたいの青年といひ
母上とおなじ癖の婦人といひ
少女の心はみだれた。

少女は白衣の婦人を憎んだ。
そして自分をおいていつた母を憎んだ。
そして寂しさうにとりのこされた父上が
何ゆゑともなく氣の毒になつた。

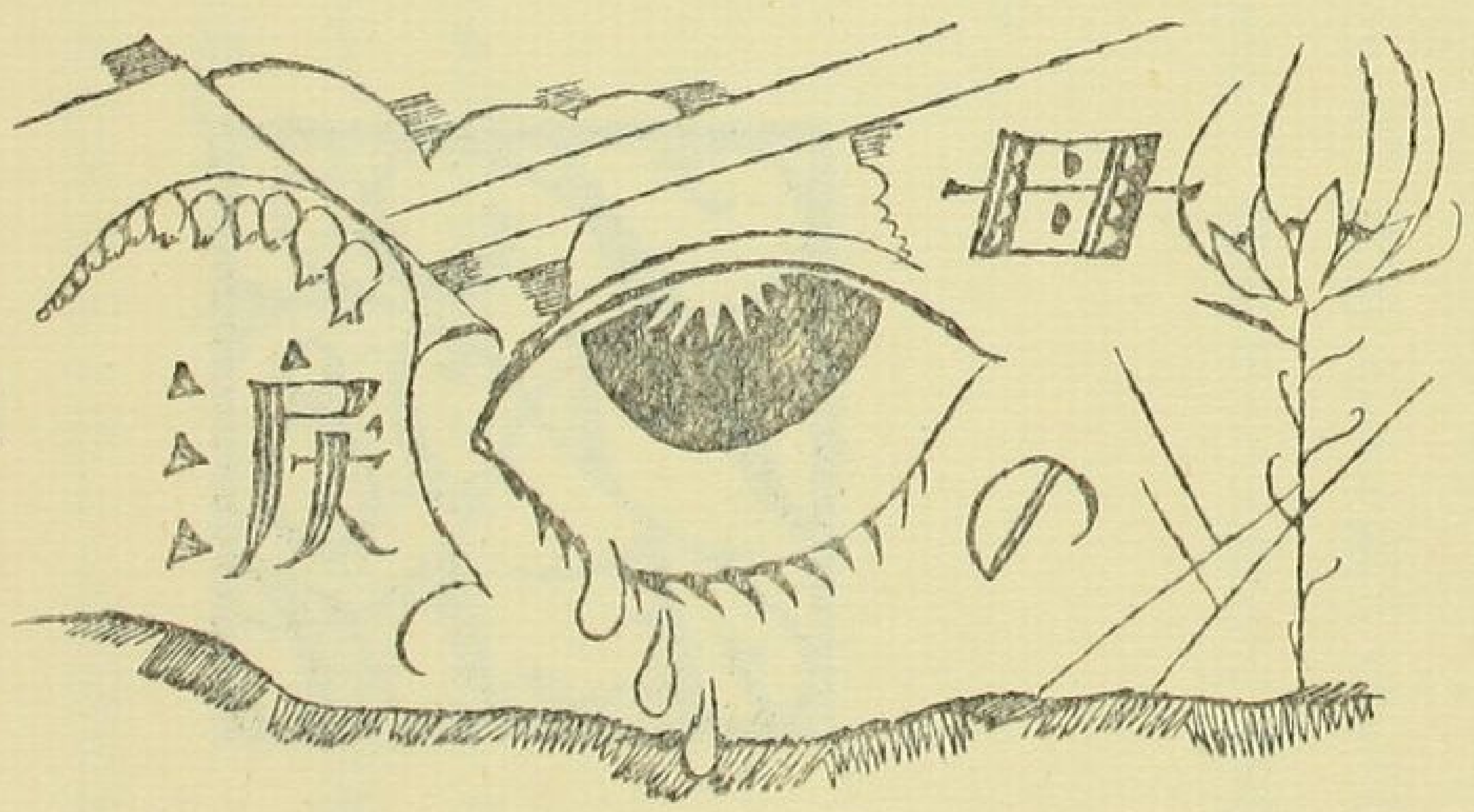
『これが母君ののこされた秋草の振袖
お孃さま、爺やめに着て見せて下さりませぬか

爺やめはまたあの時の
繪卷物のやうな母上の姿を
夢に見ることでござりませう』

『いやだわ、あたし』
『これはこれは、何ゆゑのおむつがり。』
『だつて、あたしお嫁入りするのなんかいやだわ』
『若い娘御は誰でもさやう申します。
母上のお輿入もあなたのお年頃で
たしかお十六でいらした』
『もうあたしにお母様のことを言はないでおくれ』
『これはなんとした御不興』
『あたしはいつまでも爺やとふたりで暮すのよ』

『それはもう』
『お兄さまのことをさつきやつと思出したけれど
あたしやつぱり思出さないわ
あたしは忘れてしまつたの』
『いやはや』
『昔の人の着物なんか
みんな燒いてしまつておくれ
あたしはもう見るのもいや』
少女はさう言つててらすからまつすぐに少女の部屋へ入つていつた。
あとにのこつた白髪の老人は
默つ秋て草の振袖を青い上衣を
なつかしさうに顔にあててゐた。

十月の晴れた空をしづかに風が流れた。



春の眼

——ある少女の物語から——

シオンのむすめ
かたれかし
わが愛のきみに
野邊にてか
幕屋にてか
あひまつらざりし

なぜこの歌が好きなのだか、手短かに言ふことは出來ません。ただあたしには忘れられない歌なのです。といふのはこの歌を聲を出して謳ふと、何故かしら胸のうちが何かに快く押されるやうで、そこから涙がこみあげてきて、自然な——たとへば森の中の泉のやうにしづかに流れでるのです。

それは悲哀でもなければ、むろん歡喜でもありません。

約束もなく日がくれて
約束もせぬ鐘がなり
約束もなく灯がともる

恰度、こんな風に夕闇が忍びよる心持に似てゐるとでも言つたら好いでせうか。さうです、やつぱりそれはゆふぐれの心とでもいふのでせう。それは、あの歌を謳ひ覺えたあたしの年頃が、いまのあたしになつかしいのかも知れません。

あたしは十五でした。その頃あたし達の學校へ、南の方のK市から新しく私達の片

田舍の町へ赴任して來られた若い敎師がありました。先生は私達の音樂を受持つて下さるはずでした。

「私が影山哲子(てつこ)です」

新學期の第一日に大講堂の敎壇へ、すらりとした洋裝でお立ちになつて、先生は自分を紹介なさいました。

やがて學校中の愛慕を一身にあつめる人であつたとは思へぬほど無感覺な態度で、影山先生は私達のまへに立たれたのです。

「なんだかつんとした先生ね」口(くち)のわるい生徒があたしのうしろでさう言ふのが聞えました。

「でも、いやにお世辭笑(せじわらひ)をしたり羞(はにか)んだりする先生はきつとえこひいきをするわよ」といふ生徒もありました。

あたしもこの若い先生が、いままでのどの先生とも全く違つた型だとおもつたが、

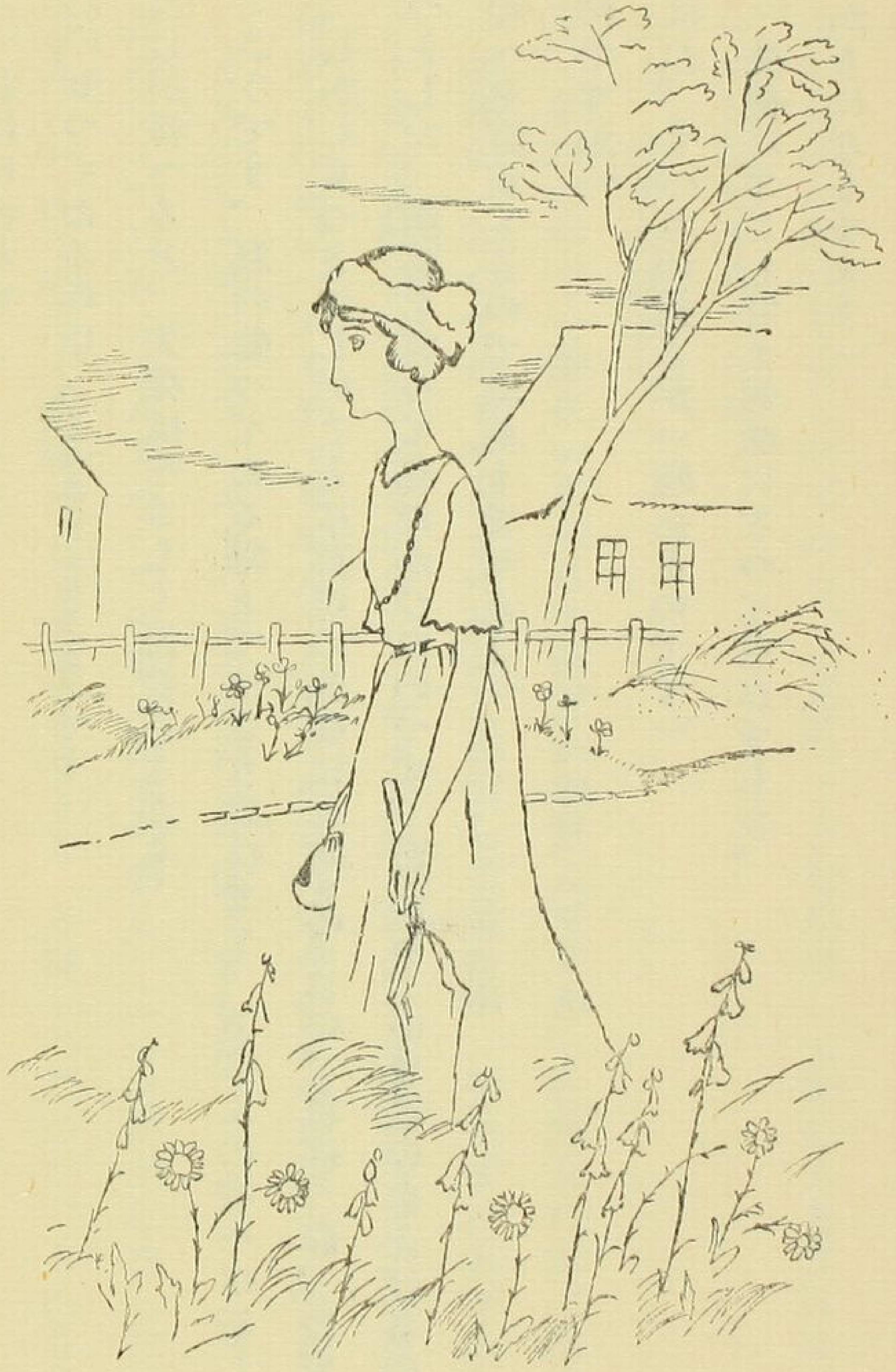
別にふかい注意も拂はずに見てゐました。ただ新しい學期と一緒に新しい敎科書に對するほどの無關心さで、先生をお迎へしたのでした。

影山先生の敎授ぶりはなかなか嚴格なものでした。それでもいつもしづかな微笑をどこか――さあどこだつたか今はつきり思出せないのですが、多分頰のあたりに湛(たた)へて、生徒達に接してゐられました。だからすこしも窮窟な感じを與へないで、それでゐてなれなれしい感情で先生に甘える生徒もありませんでした。どこの學校でもある事ですが、私達は新しい先生には一週間のうちにきつと誰がきいても最も適當なにつく・ねえむが捧げられるのですが、先生はつひにつく・ねえむを呼ばれずにおしまひになつたほどでした。

めりい・のをまんど、誰かが先生を映畫女優に見立てて、さう呼んだことがありました。なるほどどこかのをまんどの面影(おもかげ)に似たやさしさは當つてゐたけれど、もつと先生にはのをぶるなところがあつたせゐか、そのにつく・ねえむもいつか忘れられて

しまひました。
だけど先生が私達の學校を去られてから、先生のことを思出して話合ふときには、きつとすまいるを思出すのでした。
ある日のこと。先生は突然に、
「みなさん、英語の中で一番長いすぺるは何だか御存じですか」と訊かれた。生徒達はみんな一生懸命、知つてゐるかぎりの英語を思出して見たが、せいぜい五字か七字で、それより長いすぺるは思出せなかつた。みんな顔を見合せるばかりで、自信をもつて手を擧げる生徒は一人もありませんでした。中には先生のこの奇問の意味がわからないで、くすくすと笑ひだす、ふまじめな生徒さへありました。
あたしは兄のよんでゐたふらんすのろての書いた本の名を、ふつと思出しました。それはお菊さんといふ小説で、英語で、Chrysanthemums と書くのだつた。これならかなり長いと思つて、私は手を擧げた。

「Aさん」私は呼ばれた。
「あたしの知つてゐるのは Chrysanthemums です」
さうあたしが答へると、先生はやさしく微笑みながら、
「さう！さうです、私の知つてゐる限りではさう思ひます、Aさんの答へは正しいやうです。しかしもつと正しいことは英語の先生にお訊き下さい。私は、ね、ただほんのちよつとした、洒落を言つて見たかつたのです。だから、いま私の申上げるのはAさんの答へを訂正するのではありませんよ」
「先生何ですか」
「私のはね。すべるの長さが一哩あるのです」
「まあ」生徒はすこし甘え氣味になつて言ひました。
「おわかりになります？」
「いいえ、先生」



「言つて下さい、先生」

「それはね」先生は、さう仰言りながら黒板へ大きく

Smiles

とお書きになりました。

「ほらね、SとSとの間が mile あるでせう」

先生はみんなを笑はせておいて、しづかに教場を出ていかれました。

その時から私はすつかり先生が好きになつたやうです。何故好きになつたか説明することはむづかしいけれど、私がくりさんすまむすを答へてから、先生は私を特に注意して下さつたことが、先生を好きになつた原因だと言つても、それはうそでありません。誰でもこの年頃の少女は、人に好かれてゐることを知るのが好きなものですから。

先生は、最初赴任していらした時、旅の荷をお解きになつた町の宿屋から、いまも

ずつと學校へ通つていらした。このごろ先生は、靜かな部屋を探していらつしやることを、あたしはききました。

「先生をうちへお泊めしたい」とあたしはひとりで考へました。けれどあたしの家には適當な部屋がありませんでした。そのうちにあたしのくらすのNさんの家の中二階をお借りになるやうに話がきまつた。とNさんからきいたときに、私は、わけもなく「Nさんは好いわね」と思はずにはゐられませんでした。

Nさんもはじめのうちは、先生のお宿をすることを自慢で「あたしひとりの先生だわ」と言つたやうな顔をして先生の手にぶらさがつたりなんかして、學校の門を入つてくるのでした。

「いやなNさん、あなた一人の先生ぢやないわよ」と半分は嫉妬して、遠くの方でさう言ふ生徒もありました。ほんたうはあたしも、ずゐぶんNさんが羨しくて、どうかすると自分のものを人にとられたやうな泣きたいやうな心持で、Nさんが先生と伴立つていく後姿を見送つたこともありました。

「Aさん、お早やう」先生は門のところでさう言つて下さることだけに、あたしは滿足せねばなりませんでした。

「影山先生は、お家でどうしていらして？」私はNさんに訊ねるのでした。

「どうつて？しらないわ。何かよんだりかいたりしていらつしやるわ」Nさんはあつけない返事をするのです。

「何をよんでいらつしやるの」

「しらないわ、そんなこと」

「そしてあの、先生は夜は何時にお休みになるの」

「いやな人ね。夜はあたしが早いし、朝はあたしがおそいから知らないわ」

あたしは、先生のいろんなことを知りたくてしかたがなかつた。

あたしの家には牧場があつた。毎朝、あたしの牧場からこの町の家々へ新しい乳を

配達してゐた。影山先生も家の牛乳をとつていらつしやることを、あたしは思ひついた。

あたしは家のものにはないしよで、配達夫にたのんで、先生の牛乳だけは、自分で届けようと決心しました。

影山先生の中二階の雨戸はまだしまつてゐました。あたしは先生の部屋に面した庭の小徑の柴折戸へそつと手をかけた。それは愛するひとりの眠りをすこしでも妨げまいとする、そして何か愛するひとのこゝろのなかへそつと忍びこむ、冒險に似た心持を經驗しました。生れてはじめて胸がときめくといふことを知つたのです。

小徑の朝露は、あたしの裾につめたくこぼれました。

あたしは先生に對する愛情にはげまされて門をあけて庭へ入つていつた。小窓のとこへ牛乳のびんをそつとおいた。ことこと音がしたのでびつくりしたが、それはあたしの手がふるへたせゐだつた。あたしは惡いことでもした人のやうに、どんどん庭をぬけて走つて歸つた。

これがあたしの經驗した第一の祕密でありました。

あたしが牛乳を小窓へ配達していくことを、先生がお知りになつたのは間もないのちでした。そのころから先生はあたしの牧場へ夕方の散歩をしに來られた。あたしは夕方になると、二階の窓をあけてそこから先生のいらつしやる路をまばたきもせずに眺めてゐました。

あなたのために、窓をあけ
あなたのために ……

さうでした。先生のため、あたしは窓をあけて、先生をまつゆふべゆふべは言ひやうもない喜びであり、また悲しみでもありました。なぜかしら、胸がをどつて、一瞬が百年のやうでもあり、また百年を一瞬にちぢめたやうでもありました。あたしたちは――さうです、あたしはもういまは何の躊躇もなく、私達と言へるほど、先生とあ

たしとの間は深いもので、結ばれてゐました。

あたしは先生の眼から、先生の唇のわきの筋肉から、また先生のすんなりのびた指から先生の感情を正しく感じることが出來たのでした。

私達は、牧場の柵をめぐつて、あうえ・まりあやうをるがの舟唄を謳つた。そのときの歌の一つに「しをんのむすめ」がきつと謳はれたのです。その歌になると先生の心のなかに何かしら、強い感情が涙のやうに湧きあがるのを、先生の小指をもつてならんで歩いてゐるあたしには、はつきりと感じられるのでした。あたしはそつと先生の顔を仰ぎみた。先生の眉毛には涙があつた、しかし顔にはいつもなごやかな微笑を湛へて、

「Aちやん、なんでもないのよ」さう仰言つた「ただね、涙だけが流れるの。あなたはまだちひさいけれど、いまに先生の年頃になつたらわかるわ。いゝえ、わからないでも好いことなのよ」

さうして、私達は野の路の角で別れました。先生に別れると私はもう夢の中をゆく人のやうに、家の方へ歩いてゆきました。先生はただそつと、しづかに握手して別れていつておしまひになる。あたしは、もつともつとしつかりと先生の胸にふかく抱かれて、あの涙のわけをきゝたい。あたしにはどんなことでも、もうわかるだらうと思ふのでした。

あたしは先生のどこでも先生のなんでも好きだつたけれど、先生と歩くとき、先生がかして下さる先生の左の小指がとりわけ好きだつた。それは手にさはるとべちやつとくつつくやうな肌ざはりで、丸々としてゐるのに、見たところすんなりと彈力のある、あたしはべえとうべんの指を見たことはないけれど、なんでもそれは天才の音樂家の指らしい指でした。

「これはあたしの小指ね」あたしは言ふのでした。

「ええ、Aちやんの小指よ」先生はさう仰言るのでした。

「先生、この紅(べに)さし指は？」

あたしは何げなく、そのときは訊ねたのだけれど、今考へるとそのとき先生が默つて笑つていらした心持がわかるのです。その年のくりすますから、先生の紅さし指に細いぷらちなの指環がはめられました。先生はその指環のことも笑つて仰言らなかつたけれど、やがてその指環の意味も、あたしは諒解する時が來ました。

春の早いあたしの國で、桃の花が散つて、櫻の花がさきそめる三月の、ある晴れた朝のことでした。あたしはいつものやうに牛乳をもつて、先生の小窓の下へ立ちました。すると先生の窓には先生でなくひとりの男の方が朝の白い衣(きもの)をきて立つてゐました。あたしはあたしの眼の前に重(おも)い芝居の黑幕(くろまく)のやうなものが降(お)りたやうに感じて、自分の部屋へ歸つてくるまで、何ひとつ考へることも出來ないほどでした。

その夕方の散歩は、先生とながいお別れでありました。先生は牧場の柵へもたれて仰言つた。

「Aちやん、先生はもうあなたにお別れよ」

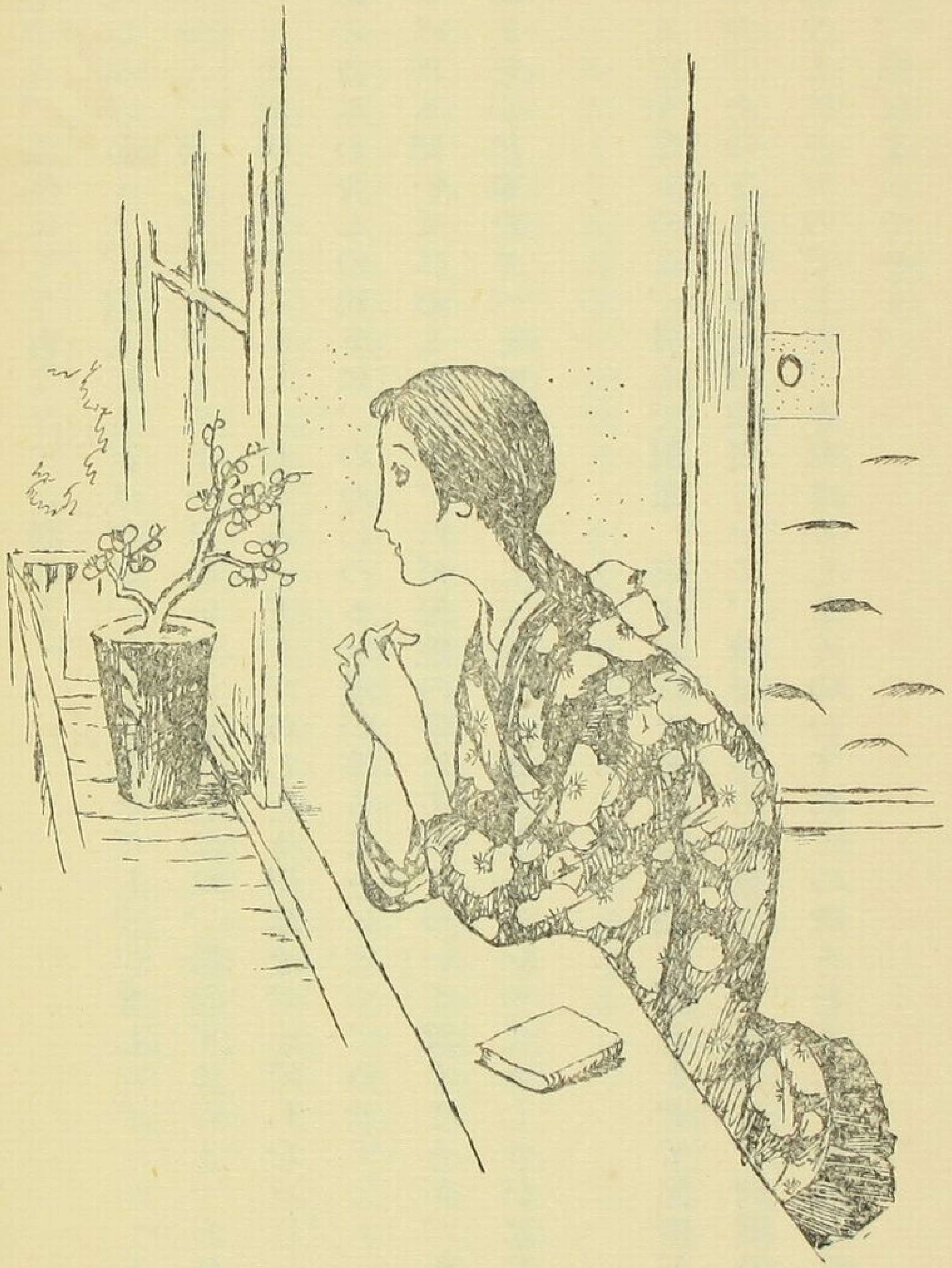
あたしはさうきくと、何んにも言はずに、わつと泣いてしまひました。

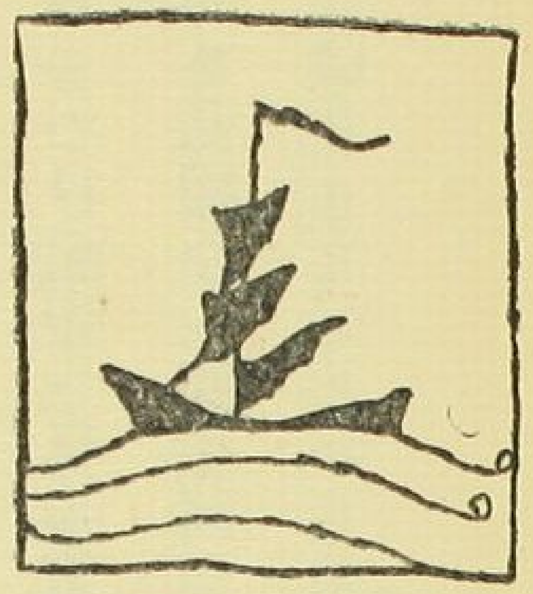
「Aちやん、喜んでくれなくてはいけないの、わたしはね、結婚するのよ」あたしは、すべてを諒解した。しかし、悲しみをどうすることも出來ませんでした。

「學校の方はわたしの代りに、わたしのお友達が來ることになつてゐますよ」

あたしは何も聞いてはゐなかつた。ただ先生の手にすがりついて泣くことが、あたしのすることが出來たすべてでした。そして先生はあたしからいつておしまひになつた。

「泣くんぢやないのよ、喜んで頂戴」涙にぬれたあたしの頬へ顏をよせて先生がさう仰言つた。あのときの少女の悲哀の中に、最初の愛の目覺めも、妬みも、別離の哀愁も、あたしは見たのでした。それは「しをんのむすめ」の歌とともに、あたしはいつまでも、忘れないでせう。





手紙の來る路

父親も母親も揃つてゐる筈でしたが、どうした譯か、鞠子は小さい時から東京を遠く離れた北の方の海岸の別莊で、物心のつくまで育てられたのです。

十四の春に、女學校へ上るために東京の屋敷へ身を寄せたが、そこの主人夫婦が鞠子の兩親かしらとも思つて見たが、誰も言つて訊かせるものもありませんでしたから、訊ねるわけにも行かなかつたのです。

その家には、十五になる男の兒をかしらに、十二になる娘と、九つの男の兒がありました。京子といふのがその娘の名でした。京子と二人一つ鏡の中で顏を見合せることがありました。姉妹ならどこか肖てゐる筈だとおもつて、よく注意して見るのですが、肖てゐるやうでもあり、ちつとも肖てゐないやうにも思はれるのでした。

「ママつたらいや、そんなにぎゆつとしては痛いわ」

朝學校へ出がけに、京子は母親に髮を結つて貰ひながら、そんな風に言つて甘えてゐるのを鞠子は羨しく思ふことがありました。鞠子は何かと氣がひけて、何もかも自分で身のまはりの始末をする習慣が、いつの間にか鞠子には誰も何も構つてくれない習慣に代つてしまひました。

京子は母親に肖て丸い顏でしたが、鞠子はどつちかといへば、父親肖で、細面の寂しい顏だちでした。しぜん口數も少なかつたから、誰にでも好かれるといふ風にはゆきませんでした。それは病身のせゐもあつたのでせう。しかし、誰も鞠子を憎むものはありませんでした。

とりわけ父親と兄の東一は、たいそう鞠子を可愛がつてくれました。

「お兄樣たら鞠子びいきばかりするのね。あたしの鼻が丸いたつて、お兄樣のお世話にはなりませんからね。好いわよ、覺えていらつしやい」。

京子は鞠子のまへでわざとそんなことをいふのでした。

「まあまあお兄樣がそんなこと仰言つたの、いやなお兄樣ね」

さういつて鞠子は、京子をなだめねばなりませんでした。

京ちやんすたこら何處ゆくの
眞直ぐ歩いたことがない
あたしの鼻の向いた方
道理で左へ曲つてる

東一はそんな唄を節をつけて歌ひながら、京子をからかひました。すると京子は泣きながら、お母樣のお部屋へ駈込みながら叫ぶのでした。

「ママ、お兄樣と鞠子さんがいけません。あたしの鼻が曲つてゐるつて」

母親にとつて自分の娘の顏容のことを惡く言はれることはそれがよし自分の子が言つたとしても、好い氣持はしないものでした。それに美しく生れついた鞠子にすぐ比

較されて考へることは、母親の悲しみを怒りにまで變へるのが常でした。

「生れは爭はれないものだ、子供のくせにいやにしやなしやなしてゐるんだよ、あの子は」

聞きたくない、聞くことを恐れてゐたことを、鞠子はつひに訊かねばなりませんでした。その蔭口をきいてから、鞠子は自分の運命がはつきりと見すかされた樣な氣がしました。

どんなに情なくせられても、憎まれても、自分の母だと信じてゐた日は幸福であつたものを、死にもせず、別れもせずに天地の間から母親を失つた心のたよりなさ。

鞠子が病氣になつて學校を引いて、また北の方の海岸の別莊へ歸つてきたのは十六になつたばかりの二月のことでした。別莊守をしてゐる老人夫婦は、しよぼしよぼした眼に涙を一杯溜めて抱きあげるばかりに喜びました。小さい時から手鹽にかけて育てた言はば育ての親でしたから、實際抱きあげても不自然ではなかつたのですが、足かけ三年が間に抱くこともはばかるほど大人になつてゐた鞠子の姿を見ては、新しい涙を流すのでした。

「お孃樣がお惡いと聞いて、婆奴はあなた鹽斷をして案じてゐましたが、お顏を見てこれで安心しましたよ」

「まあねえ。ありがたうよ、爺や。でもたいした事はないのよ。あたしには東京は向かないわ。やつぱりお前達の許が一番藥だわ」

「やれやれ、まあほんによう歸つて下された。さうとも、さうとも、生れた土地より育つた土地と言ひましてなあ。土が何よりの藥ですぞえ」

停車場から四五丁の野の路を、鞠子達はぶらぶらと車を先きへやつて歩いてゐた。

「お爺さんや。お前さんは一足先へいつて風呂でもたきつけてくだんせ」婆やにさう注意せられて

「ほいこれは誤まつた。さうだつけなう。お孃さま、それではおさきへ」おどけた

風をしながら爺やは歩いていつた。

「やつぱり田舍は好いのね。こちらにゐる時は東京があたしの故都だと思つてゐたのに、東京へいつて見るとやつぱりこちらの方がそりや懷しかつたわ」

鞠子が見馴れた四方の風景を見渡しながら言へば

「さうともさうとも、あなた。東京は辛い所だと言ひますもの、なんぼう辛いこともありやしたやら」さう言つて、婆やは顔色を讀むやうに鞠子の顔を見た。鞠子はそれと察したが、いまそのことに觸れたくなかつたので

「そんなことはないわ婆や。どこだつて人間はみんな親切だけれど、こんなにのんびりした氣持にはとてもなれないわ」

と鞠子に言はれて、婆やはまた新しい涙を前掛で拭きながら

「はいはい。お嬢様のやうな人柄がいつそおいたはしい」

「もう御門へついたわよ、婆や。あら、もう梅が咲いたのね、去年もこんなに早く咲いたかしら」

「はい、はい。ことしは一週間も早いつて爺が言ひますよ」

「あたしが歸つたから精出して咲いたのよ」

「これは道理ぢや」婆やもさう言つて誘はれて笑ひました。

鞠子は、床につくほどの病人ではなかつたから老人夫婦といつしよにつとめて賑やかに笑つてゐたが、自分の部屋へ入ると急に氣が落ちて、何かなしに寂しかつた。

東一からは毎日の樣に手紙が着いた。鞠子の方は、母親や京子の手前遠慮しながら三度に一度、わざと京子と名前をならべて書いて返事を出した。

何か東一に言ひたいことが、百ページも書けるやうな氣がして、さてペンを取つて見ると一行書くのさへ考へ考へして、書くことにとりとめはなかつた。

東一の手紙には、學校のこと運動のこと街のこと犬のことなどをやたらに書き竝べて、ほかには何も書いてなかつた。自分のことを言へば「昨夜は試驗の勉强で三時ま

でやつたので今日は學校でぼんやりして代數を三題間違へた」と言つたやうなことであつた。それでも鞠子には嬉しかつた。手紙は長ければ長いほど嬉しかつた。

鞠子は毎朝東一から來る手紙を待つやうになつた。桃色の朝着をきてバルコニイの手すりに倚つて、郵便屋が東一の手紙を持つて歩いて來る路の方を、ぢつと瞶めて一時間でも二時間でも待つた。

別莊は岡の上に立つてゐたから、バルコニイから見ると、畑の中をうねつた白い路が遠く細くなつて畑の中に消える所まで見渡すことが出來るのであつた。

毎朝東一の手紙を持つてくる郵便屋は、まだやつと十五六の少年であつた。さう恰度それは東一とおないどしぐらゐで、手足のすんなりした田舍の子供とは思へぬほど品の好い顏をした少年であつた。

別莊のお孃さんが、バルコニイの上に立つて待つてゐるであらうところの手紙を手に持つて、遠くからにこにこしながら、その少年は近づいてきた。

「ありがたうよ」鞠子はさう言つて、手紙を受取ると

「はい」と少年は言ふのでした。

きれいな朝着をきてバルコニイに立つてゐる鞠子の姿を見ることは、この少年にとつては一つの大きな喜びであつた。そしてそれはこの少年の一つの心の生活であつた。

鞠子の生活は、昨日も今日も、今日の明日も少しの變化もない、單調なものであつた。ただ東京から來る手紙を待つことがたつた一つの希望でもあり、その手紙に返事をかくことが仕事の全部でありました。

朝の露臺に立つて手紙の來る路を、遠く眺めやる時、鞠子が待ちこがれてゐる手紙を持つてくる少年郵便配達夫が鞠子の心持の中に形をなして映ることは無理のないことでした。手紙を待つことは、少年配達夫を待つことでありました。どうかすると、手紙と配達夫とがいつしよくたになつて、配達夫のけなげな姿を待つてゐるやうな心持さへ、鞠子の心のうちに育つてくるのでした。

そしてこの心持は自然と言葉のふしに、動作のうへにいつか表はれて、配達夫にもそれが感ぜられずにはゐませんでした。
　幸吉は――その少年配達夫は、朝郵便局へ出勤して今日配達する郵便物を選り分けながら「野崎鞠子様」と書いた手紙が出てくるのを樂しみにしました。もしも鞠子に宛てた手紙がなかつた日には、幸吉はがつかりしてもう今日の仕事を精出してする元氣を失つて、ぼんやり道を歩いた。間違つて配達したり、道の傍の溝へ落ちたりするほどでした。それは鞠子にあてた郵便物がない時には、鞠子の顔を見ることが出來ないからでした。それがまた鞠子にすまないことをした自分の罪でもあるやうに、悲しくなるのでした。
「何だつて、あんなに待つてゐる人に手紙を書かないのだらう。俺だつたら毎日、一日に三本でも五本でも手紙を書くのだがなあ」
　幸吉はそんな風に考へて、その日は寂しさうに家へ歸つてくるのでした。幸吉は家

へ歸つて、母一人子一人の貧しい夕餉をすませて寒い布團の中にもぐりこんで、考へつづけるのでした。
「それにしても、あの美しいお孃さまに手紙を書くことの出來る男はどんな男であらう。東一といふのはどんな人間であらう。あんなにお孃さんに待たれてゐる手紙のぬしは、なんといふ幸福な人であらう。」
　幸吉は羨望と嫉妬とのために、床の中で苦しい寢返りを打ちながら考へるのでした。しかし、自分が東一といふ男でないこと、自分はただ貧しい一人の郵便配達夫に過ぎないことを考へると、自分を悲しまずにはゐられませんでした。どう考へて見ても、それは幸吉の全く與り知らない世界でありました。幸吉はあきらめて布團をかぶつて冴えた眼を無理につむつて悲しい心持をおしつぶしました。
　東一といふ男は、きつと立派な金持の家の息子に違ひない。そしてきつとどこかの大學へでも入つてゐる不自由のない學生に違ひない。金持の家に生れたといふことの

ために、立派な服裝で學校へいつたり、あんな美しいお孃さんと交際出來るのだ。俺だつてそんな家に生れてゐたら、東一と同じやうに、學校へもゆけるし、立派な人間になることも出來るのだ。そしたら思ふことは何でも出來るのだ。どうして俺は早くから父親に死別れたり、貧しい家に母と二人住んで小學校を卒へるか卒へないうちにこんな郵便配達夫なんかにならねばならなかつたのか、そして學校へもゆけず、紳士のやうな生活も出來ず、このまゝ年をとつてしまふのだらうか。それはどういふ譯だらう。ただそんな家に生れなかつたからだ。どうして生れなかつたのだ。親が貧しい家へ生んでしまつたからか。親は知らないことで神樣が俺をさういふ風に選んだのか。親に責任はない。ただ俺が不運なのだけれど、それが不運なのだらうか。それは俺に分らない。なにしろ寂しい。悲しい。

　幸吉は、つぎからつぎへと考へ考へしてゐるうちに、いつの間にか母親は起きて、七輪の下をばたばたとあふいでゐる樣子だ。

「幸吉、さあ朝飯が出來たぞえ」

　幸吉はまた七時までに郵便局へ出勤せねばならなかつた。

　幸吉は、いつか山から捕へてきた一羽の青い小鳥を飼つて、非常にそれを可愛がつてゐました。ロシアのお伽噺にあるやうに、この小鳥がある日幸吉を山へつれていつて、

「あなたはわたしを可愛がつて下さるから、その返禮にあなたに幸福をさづけてあげませう。わたしのこの羽根を一本あげますからそれを帽子にさして、アヴェ・マリアに三度お祈りをなさい、さうするとあなたが心で思つたものが何でも眼の前に出てきますから」と、さう言つてくれたなら。幸吉の青い小鳥は一度もそんなことを言ひませんでした。だから幸吉には、とても幸運がむいて來さうもありませんでした。

　ある日幸吉は、鞠子のとこへ手紙を配達した歸りに、鞠子から一通の手紙を出すやうに頼まれた。これはいつものことですが、宛名はいつものやうに「東京麹町區三番

町十五山田東一様御許へ」としてあります。裏には「つぼみ」と横にしめをして「あなたのマリから」としてあるのでした。

幸吉は、今までにもいく度となく、かうした女から男へやる手紙を、或は男から女へ送る手紙を配達したけれど、別になんの感情もなしに、ただ事務的に配達してしまふのでした。それがどうしたものか、けふ鞠子に託された手紙だけはどうも幸吉の心持を苦しませるのでした。それはこの手紙にあの美しいお孃さんがどんなやさしい事を書いておいたのかどういふ風な間柄なのか、なんとなく手紙を開封して中をよんでみたい欲望と好奇心のために、幸吉はその手紙をしつかり手に持つて、道を歩きながら考へるのでした。

他人の信書を開封するといふことは、どんな目的のためにでも惡いことだ。まして自分の職業を利用して、他人の感情を盜むことは、よし誰にも知れぬやうに中を見てそのまま郵送するにしても、まるでそれは盜みをすることに違ひはない。「いけない、いけない！」」幸吉は自分を叱りながら、鞄の中へその手紙を押込んでどんどん走つた。

しかし幸吉は、とうとう好奇心と嫉妬との誘惑を退けることが出來ないで、その手紙を持つたまま家へ歸つてしまつた。しかしさすがに、それを明けて見る勇氣はなかつた。誰にも知れないやう古いノォトの中へはさんでしまつておいた。翌日も郵便局へ出勤した。その日は鞠子へゆく手紙はなかつたが、幸吉は鞠子に對して、まるで罪人のやうなひけ目を感じて、もう二度と鞠子の顏を見られないやうに思はれた。幸吉は今迄こんな暗い重い心持を感じたことはなかつた。それならばすぐに、その手紙を宛名の局へ郵送すれば好いのですが、幸吉はそのノォトを見るのさへ怖ろしくて、それをまた自分の手に取出すことさへ出來ないもののやうに思ふのだつた。

それは、學校は春の休暇が始まる頃でありました。この海濱の別莊へ東京からの客があつた。停車場から二臺の人力車にのつて、別莊へゆく白い長い道を走つてゆくのを、幸吉は遠く見てゐました。

「東一といふ人だ！」幸吉はさう考へると、何かしら惡いものを見た時のやうに、もう素直な心持でその方を見ることが出來ませんでした。それにあの人が鞠子に逢つたら、自分が祕かに持つてゐる手紙のこともばれるに違ひない。

幸吉は不幸のどん底を歩くやうな心持で、とぼとぼと別莊へゆく道を歩いて歸つて來ました。ある朝は、なつかしい人を見ることの出來るあかるい希望を抱きながら、ある日は、やさしい言葉をかけて貰へた喜びを身體全體に感じながら、この道を歩いたのだつた。それが今はあの人のまへに罪人として、まともになつかしい人の顏を見ることも出來ない自分を憐みながら歩いた。

どんなに考へても自分は郵便配達夫以上のものにはなれない。それに今はもう惡いことをした罪は、どうしても自分の身から洗ひおとすことは出來ない。この世に、もしどんなに貧しくてさへも、生きてゆくことの出來ない自分のやうにも思はれるのであつた。

鞠子の別莊の門で止まつた車は、果して東一であつた。一人は女中のお梅であつた。鞠子の喜びは、朝朝に露臺で待つた手紙の待ち遠うさや、不幸な運命を忘れさすには充分なものであつた。

その夕方、別莊の庭先きの波うちぎはを東一と鞠子とが歩いてゐた。すると砂の上に打上げられた一人の少年の死骸をまづ東一が發見した。それはまぎれもなくかの少年郵便配達夫であることを、何故か鞠子はすぐに感じて、東一の手にやつとすがりついたほど驚いた。

死骸はすぐに近所の人人によつて介抱せられたが、再び生き返りはしなかつた。その懷に鞠子から東一に宛てた青い封筒がしつかりと抱かれてゐた。

この少年郵便配達夫を誰が罰することが出來るだらう。

幾山河

今日もお篠は洋吉を誘つて峠へいつた。
そこは岩手と青森の國境で
どちらを向いても山ばかり
山の上にまた山が見えた。
遠く夢のやうにつらなる山を見てゐると
洋吉はまたしても東京が戀しかつた。
洋吉は小學校を卒業すると親爺の手助けに毎日野良へ出た。
親爺が百姓であるやうに親の親も百姓だつた。
先祖を百姓に持つた洋吉はやはり百姓になる運命だつた。

十七の洋吉の若い夢は都會が戀しかつた。
そこにはあらゆる幸福、身をとろかす歡樂たぐひまれなる美しいもの丶數々
そこはあらゆる幸福の搖籃であつた。
洋吉はぢつと東の方の山を夢心地に眺めてゐた。
「洋吉はまた東京の夢を見てゐるのね。やつぱり行つて見なけりやわからないのね。
無理はないわ、あたしだつてあんなに東京へ行きたくて行きたくて
めちやくちやに家を飛出したことがあつたもの、
だけど今考へると馬鹿だつたわ」
お篠はしみじみさう言つて
やはり、洋吉の見てゐる遠くの山へ見るともなく眼をやつた。
お篠は二十一だつた。
今から四年前、お篠が土地の女學校を出ると

資產家の娘ではあり降るやうにある嫁入りの口を見向きもせず
お篠は東京へ東京へ、何をするあても、何になる目的もなしに飛出してしまつた。
親に叛いたお篠は
やつと母親の情けの僅かな仕送りで世の中へぽつんと出てきた。
人間ひとりどうにか暮してゆける、さう思つたあてははづれがちで
今日食べるものもない日さへあつた。
そんな苦勞をして身も心もつかれて
お篠は四年振りで家へ歸つてきたのだつた。
洋吉は祖父の代からお篠の家へ仕へてゐた。
お篠のおるがんに合せて上手に草笛をふくものがあつた。
やつとお篠が女學校へ上つた年のことだつた。
お篠は洋吉の音樂的の天分を認めてゐた。

しかし百姓の子は百姓になるより外なかつた。
お篠が東京へ立つ日も洋吉はお篠を停車場へ送つていつた。
『洋吉、あたしはこんな風に父樣の機嫌を損じてゆくのだから
今はどうにもならないけれど
あたしが一人で暮せるやうになつたら、お前を東京へ呼んであげてよ。
きつとその時まで、待つておいで」
洋吉はこの言葉をそらだのみに四年の間待つた。
しかしお篠はその日かぎり音信不通のまゝ
病氣になつて、歸つてきた。
「田舍は神に造られ都會は人に造らる
と言ふ言葉を知つてゐる。ほんとにさうだわ。
東京には神樣なんてないわよ。

夜更けて人間がみんな眠つてしまつた。
東京の街の寂しさは洋吉には想像もつかないわ。
ほんとにあたし聲をあげて泣いたわ。
神樣にどんなにお祈りをしたでせう。
神さま。
どうかあなたの罪の子をおゆるし下さい。
そしてほんのちよつぴり小雀のたべるほど
食べるものを與へて下さい。
たつたそれだけお願ひです。
あたしはさう言つてお祈りしたけど神樣はきいては下さらなかつた。」
「もうその話はたくさんです」
洋吉はすげなく言つた。

「ぼくは、神様の造つた田舍がいやです。
人間と人間とが重り合つてもがいてゐる都會へいつてぼくの力をためして見たい。
ぼくは元氣です。ぼくは若いのです。そしていろんな夢を持つてゐます。
この夢を田舍の田の中へ埋めたくはありません。
ぼくは姉さんの贈つて下さつたあのヴゐおりんを持つてよその門にたちます。
きつとぼくは成功して見せませう。
田舍の神様は音樂もわからないのです。
ぼくは東京の樂壇に立つて唄ふつもりはありません。
名もない街の樂手で澤山です。
ただ東京の街がなつかしいのです。灯の海のやうな東京の街。
人間の造つたあらゆる美しいもの、洪水のやうな東京の街。
ああ、ぼくは東京へゆきたい。」

さう言つた洋吉は頭の毛を毟りながらうつむいた。
お篠は洋吉の頭をやさしく撫でながら
どう言つたものか考へてゐた。
「洋吉は泣いてゐるの？」お篠はそつときいた。
「いいえ」洋吉は涙をのんだ。
「あたしはお前にはなんにも話さなかつたわね。
あたしは、ね。もうむかしのお篠ぢやないのよ。
むかしのやうに洋吉を可愛がつてあげる資格がないのよ。
あんたが、今東京へゆくことをとめはしないわ。
だけど、あたしあんたといつしよに
東京へゆくことは出來ないの。
いいえ、あたしは、いつても好いわ。あたしはどうせこんな身體ですもの

どこで死んでも、後悔はしないわ。
だけど、あんたを東京へ連れ出してはあんたの親たちにすまない
あたしはこんどといふ今度は親といふものが子供のことを
どんなに心配するものだかを知つたの。
考へて見りや親の勝手だし、動物だつて本能の愛があるんだもの
人間の親の愛だつておなじものだわ。
だけどその親の心配は心配に違ひないわね。
あたしは昔の人のいふやうに、
孝行するためにでもなければ親を愛するためでもないの
ただ親の心が氣の毒なの。だけど洋吉にはそんな心持は分らないわ、ね。
分らなくても、あたしが洋吉を連れて東京へゆけないわけは分るでしよ、ね。
それにあたしが東京でどんな目にあつたか

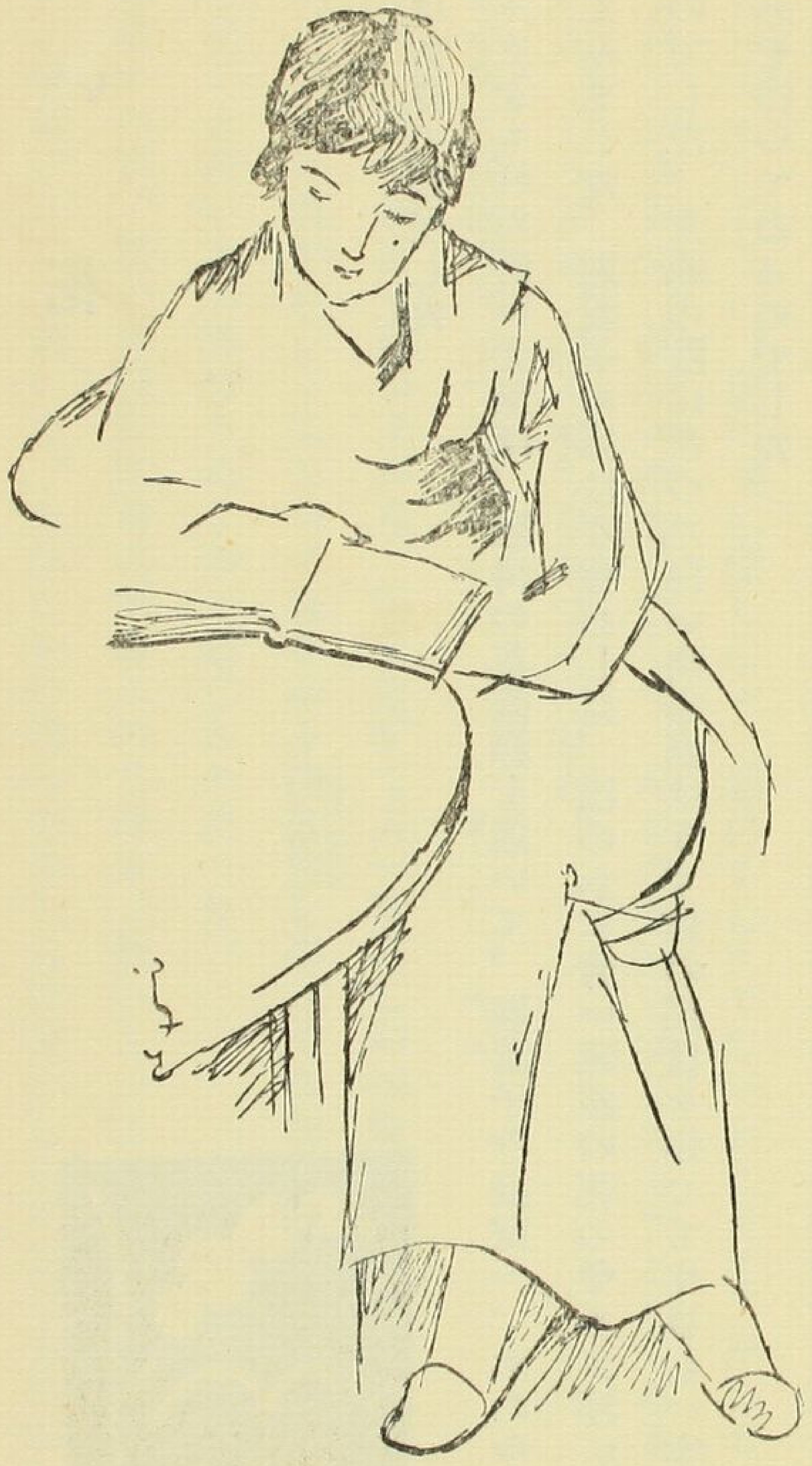
どんなひどい暮しをしたか、ただの一日でもあたしの暮しを見たら
洋吉だつて東京へゆかうとは言はないわ
あたしはそれを、お前に言へないの。
私は恥かしいのよ。いいえ男だつて同じだわ。
どんな美しい誘惑もどんな惨い運命も東京にはちやんと待つてゐる。
ねえ、洋吉あたしと田舎で暮してくれない。」
洋吉の答はなかつた。お篠はかさねて
「だけど、あたしはもう洋吉の姉さんぢやないのね。
むかしのお篠だつたらどんなにでもお前を愛してあげられたんだけど—
その頃のあたしはすまないけれどお前なんか眼の中になかつたのね。
今こそ、私はお前が世の中で一番好きなの
だけど、どうにもならないわ。

それもこれもみんな東京がいけないの。
いいえ東京が惡いのぢやないわ。
あたしが馬鹿だつたのよ。
馬鹿、馬鹿、馬鹿！あは、は、は」
お篠は急に笑ひだした。
このひすてりつくな笑ひに洋吉はびつくりして顏をあげた。
「吃驚した？　私は氣狂よ。あは、は、は。
東京には神樣がゐないのよ。だからあたし好い氣になつてあばれたわよ。
さんでりあがぱつとつくとね。じやず・ばんどよ。ふおくす・とろつとよ、ら、ら、
ら、ら。
あたしの耳のとこでね。（一時半きつかり）さう言つたわ。
あたし行つたわよ。紫色のお酒をのんだわ。

心臟のとこがどきんどきんつて鳴つたわ。そして身體中が熱くなつて、あは、は、
は。
おどろいたでしよ。あたしは馬鹿ね。」
お篠は熱にうかされたやうに口から出まかせに喋つてゐたかと思ふと。急に默つた
そして袖を眼にあてて泣いた。
洋吉は、どう慰めて好いか知らなかつた。洋吉はだまつてお篠の背中を撫でた。
お篠はおいおいと聲をあげて泣いた。
「姉さん、泣かないで姉さんが泣くとぼくがこまるもの」
「泣かないわ、泣かないわ、あは、は、は、
姉さんは笑つてゐるのよ。たのしい東京をおもひだしてね。
考へて見ると樂しかつたわ。
銀のないふはきさらぎの

かなしきものは凍えたる。
　貧しきぱんをちぎるなり。
あの詩の通りだわ。
ねえ、洋吉、お前も東京へおいでな。東京は好いわ。ねえ、今日はお前の送別會よ。
女は歸つてくるけれど男は歸らないものよ。決して歸つちやだめよ。
さ、草笛をお吹き、ね。あたしが謠ふわよ。
　ぎんの　ないふ　は　き さ ら　ぎ　の
駄目よ、洋吉、泣いちや、だめよ。
さ、か　な　し　き　も　の　は　さあ、お吹き、
か　な　し　き　お篠の唄は風にふかれて
お篠の唄は泣き聲になつた。
洋吉は草笛をふいた。

その唄と草笛の音は風にふかれて遠く、遠く
國境のはるかむかうへけいろうと流れた。
幾山河は默々としづかに、いつまでも連つてゐた。



青い花

I

それは六月の朝でした。

庭の木立をもれた青い光線は、窓掛の花模様を透いて、迦葉子の寢室へ、水のやうに流れこみました。迦葉子の露はな襟あしは、ほのかに青い睡蓮の花のやうに浮いて見えるのでした。光線の陰になつた白い掛布團はうす紫の縞目を作つてやさしい主人の眼覺めを待つてゐるのでした。

ほつかりと薔薇の蕾が開くやうに、迦葉子は眼をあいて、あたりを見まはしました。すべては昨日のやうに、今日もあるのでした。昨日のままで今日もかうして眼をさましたことが、何か、掌を合せて感謝したいやうな、ほがらかなうれしい心持を誘ふの

でした。

おや！　何だつたらう、あの夢は？

なんだかいやないやなところで眼がさめたのだつた。いやいやそれは何でもないことだつたのかもしれない。思出すに價しない、忘れてしまつていいことだ。だつて、かうして晴やかな朝に、健康に眼をさまして、今日の生活をはじめようとしてゐるのではないか。さうだわ、なんでもなかつたのだわ。

「まあなんて綺麗な光りでせう」

迦葉子は、さう獨言を言ひながら、手をあげて力一杯さしのべた。まるまるとした白い腕は、すぐに血がめぐりはじめて見るみる淡紅色を帶びてきた。迦葉子は、身内からむくむくと若い力が漲つてわくのを感じるのだつた。

「私は若いのだ。私の身體には青春があふれてゐる。若いといふことだけが既に幸福なのだ」迦葉子はさう考へた。しかしその考へのうしろに何かしら不安なものが、

こつぷの底のおりのやうに殘つてゐることを感じるのだつた。

迦葉子は、その謂はれのしれない不安なものを振りおとしでもするやうに、勢ひよく掛布團を押のけて、べつどを飛びおりた。

と、卓子の上に開封した一通の手紙を見た。昨夜(ゆうべ)のままで、それはK市の明子から來たので、迦葉子は、手紙を取上げてところどころ讀みかへした。

II

――四月馬鹿にはほんとにあなたらしい思付きでふうるをなさつたわね。あたしすつかりほんたうかと思つたわ。でもあなたはいつでも一生結婚なんかしないつて言つていらしたわね。母校の會堂(ちやぺる)の裏のくろうばあの中へ坐つて、私達はどんなに美しい人生の方を眺めやつたことでせう。あなたの氣高い理想や希望を、近い未來にどんなに熱心に約束したことでせう。學校を出てからまだやつと一年にもならないのに、私としたことが、遠い昔のやうに、あの頃を思ひ出すのでせう。

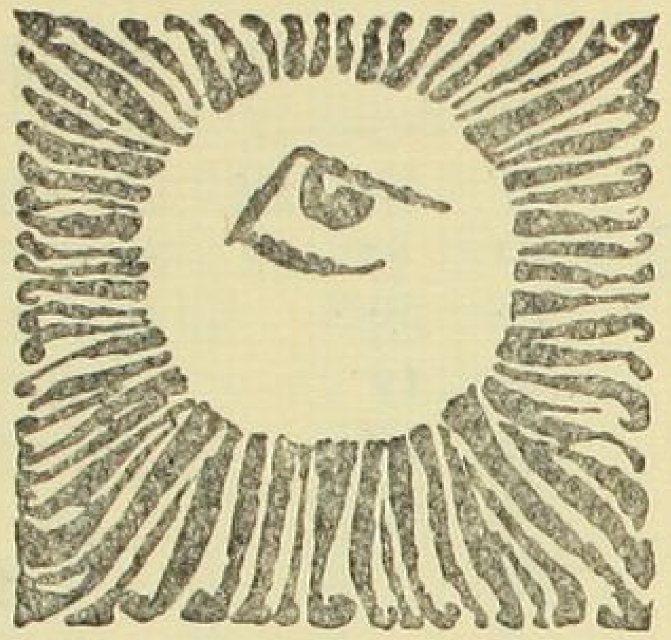
御免なさいね。あたしのおつき合に、あなたにいろんな思出をおさせするつもりではなかつたのです。でも僅か一年のうちに、人間の心持が境遇につれてこんなものに變つてしまふものかと思ふと、あたし寂しいの、一生東京で暮すだらうと思つてゐたのに、あなたたちに別れて、あたしはK市へきました。あなたはいかが、あの頃のやうにお元氣なことを祈つてゐます。あなたの「青い花」は、この間のおたよりに半ば仕上つたとお書きになつたわね。もうよほど出來上つたことと思ひます。一日も早く完成する日を、樂んでゐるあたしを忘れないで下さいましね。

この間のおたよりには申上げなかつたかも知れませんが、私たち――私達と書きました。私達といふのは私と兄のことです――は、急に外國の方へゆくことになりました。ひとまづふらんすへ上ることになるのでせうが、兄の仕事の都合でどこへ滯在するやうになるか、あたしにはまだわかりませんの。出發の前に、お別れにあがりたいと思つてはゐますが、なにしろこの月の十六日の船ですから、或はお目にかかれない

かと、心殘りに思ひます。兄からもくれぐれもおよろしくと申しました――
昨夜の夢の中の不安なものは、まさにこの明子の手紙にかかるものであつた。けれど迦葉子は、それをさうは思ひたくなかつた。

聖摩理亞女學校に通つてゐる頃から、明子は一番親しくあつたし、どんなことでも打明けて話せる最も善い友達であつた。今とても、その親しさに變りはないのだが、去年の震災のために明子はK市へ一家を擧げて行つてしまふし、迦葉子はこの海濱の別莊へ移つて住むやうになつてから、明子からのたよりが心待に待たれるくせに、手紙を手にとりあげると、あけて見るのが不安だつた。不安の根を洗つて考へると、明子の身の上に新しく起るであらうことを怖れてゐたのだつた。それは明子の幸福になることが、迦葉子にとつては運命的の不幸になることであつたから。その事はつひに起つたのだ。（未完）

曠野の子



扉（たいとる）

すべての女性の墓標がかく書かれる。
彼女は生れ。
彼女は泣き。
彼女は戀し。
彼女は死す。
わが物語の主人もまさにさうであつた。

1

人はみな一度は

人生のげつせまねを通る。
梢が、生れた土地を
再び踏んだのは、足かけ十年。
月日は流れ
身は流れ
母の家を脱け出て
星月夜の野を走つた。

2

鈴蘭の花の匂は
十年前の夜のことを
思出させた。
昔ながらの馬車は

生れた山の方へ
彼女を運んでゆく。
馬車の窓から
遠い野を見た。

3

名を梢と言つた。

梢が都へ出る十六の春まで、彼女を育ててくれた搖籃であつた故郷の自然は、昔ながらに彼女を迎へた。十年前青春の功名を夢みながら、自信と希望に輝く顔をあげて都の方へこの曠野を過ぎた、がいま鈴蘭の匂をかいで感じる、束縛に似た心持は何であらう。それが彼女を待つてゐるただ一人の家族である。彼女の母への心づかひだとは思ひたくなかつた。また谷川の水のやうに心の底をしづかに流れるこの悲哀は何であらう。それは彼女の初戀に似た心をよせた少年へのなつかしい感傷であらうか。い

まひとつ心の片隅に黑い影のやうにうづくまる怒りに似た自責の感は、まさに牧師寺田氏に對する感情に違ひなかつた。それは實に彼女にとつては痛ましい半生を掩ふ記憶であつた。

しかし今は、しづかに、誰をも憎まずに思出せるのであつた。

梢は生れた町の町はづれで馬車を降りた。まばらに並んだ商家の灯(あかし)が、巾の廣い街道を縞のやうに染めてゐた。黃と黑とだんだら縞は、不吉な豫感を暗示したものである。

4

梢は母の家の戸口に立つた。

「お母樣、あなたのひとり娘は、歸つて來ました。身も心も傷ついて、あなたの膝へ歸つてきました。お母樣、あなたの娘を叱らないで下さい。あなたの娘は、もう廣い世の中から見はなされて勞れて歸つてきました」

心のうちにさう言ひながら、梢はまつすぐに母の方へ手をさしのべた、母は病床にあつた。年老いて光の弱い母の眼から、しづかに涙がながれ落ちるのを、梢はだまつて手をとつてながめた。握り合つた手のうちに、寛容も、愛情も、悔恨も、憐愛も、すべてが流れ合つた。

母は知つてゐて知らぬ顔をしてゐるのか、世間の多くの母の樣に、受身の弱い女心からあきらめてゐるのか、寺田牧師がいまも親切に母親を見舞つて下さる旨を、梢に話した。

梢は、まだこの古い悲しい街に、昔を思出させるものがあるのを悲しまずにはゐられなかつた。だが、藥屋の玉次郎はどうしたであらう。十年の放浪の間、殆んど忘れてゐた彼に對する感情が、新しい涙のやうに梢の心におしよせてくるのであつた。

梢が十二で、玉次郎が十三の夏のはじめであつた。あのことを梢は思出すのであつた。

5

梢の父親と玉次郎の父とが、碁打友達であるところから、よく父につれられていつて、玉次郎と遊んだものであつた。ぱちりぱちりといふ碁石の音をききながら、梢は玉次郎と玉次郎の弟達と、離座敷と土藏との間の柿の木の下へ筵（むしろ）をしいて學校ごつこをした。玉次郎が主人で、梢がその夫人になるのであつた。朝子、時子、留吉の三人は子供で學校へゆくのであつた。三人の子供を學校へ送り出してから、梢は、やれやれと言ひながら草臥（くたび）れた風をして横になるのであつた。ぱちりぱちりと碁石の音が聞えて來た。

「あなたもちよつとおやすみなさいよ」梢夫人が言ふのであつた。「うん」と玉次郎が答へた。

隣の齒醫者の息子の金太郎が、いきなりやつて來た。二人をびつくらさせておいて「やあい、學校でみんなに言つてやるぞ」と言ひながらいつてしまつた。

梢は、なぜともしらず悲しくなつて、庭の隅の車井戸の枠によりかゝつて井戸の中を覗いてゐた。そこには雪の下の白い花にかこまれて、うす暗い中に十五夜の月ほどに見える水があつた。よく見ると、水の上に自分の顔がちひさく映つてゐる。悲しさがこみあげて、涙がおちたら井戸の水に渦が出來て、映つた顔が見えなくなつてしまつた。またそれが悲しかつた。

6

その時、梢は十四になつてゐた。玉次郎の母親は、彼が五つの時、弟の留吉を生むとすぐ死んだので、女けのすくない玉次郎の家庭は淋しかつた。

「梢さんをうちの子に貰はうかね」玉次郎の父親はよく、梢を可愛がりながらさう言つたものであつた。

それは土用干の日であつた。梢は玉次郎と二人、二番藏の中へ入つていつた。うるゑすとかせめん圓（ゑん）とか、奇應丸とか、金文字で彫刻した藥の商板（くわんばん）がごたごたと異樣な

光りをもつて壁に掛つてゐた。黒い棚の方からいろんな藥の匂が、重く鼻をついた。こればかりではない。そこには玉次郎の母親が若い頃着たといふ、帶や裲襠(うちかけ)や小紋の着物や、友禪の小袖が、まるで錦繪でも見るやうに掛けつらねてあつた。梢はうつとりとこの不思議な世界を見てゐた。

「これ着て見ないの?」玉次郎が言つて、刺繡(さしぬひ)のある友禪の小袖を出した。梢は帶をといて單衣の上へ小袖をかさねた。袖へ手を通すはずみに、玉次郎の首のとこへ手が觸れた。

「あら、ごめんなさい」「好いんだよ」ふたりは眞赤になつてしまつた。そんなことがあつて以來、ふたりの心は、だんだん近づいて、結ばれてゆくやうに見えたのに、ふたりの交遊はだんだん遠くなつていつた。

7

母は死んだ。

母ひとり娘ひとりの母親は、旅に出てゐる娘の顔を見ないうちは、死んでも死にきれない。娘の歸りを待つて、待つて、やつと娘の顔を見ると、すがつてゐた綱が切れたやうにぽつりと死んでしまつた。

梢は今更にあたりを見まはして、たつたひとりこの世に取殘されてゐることに氣づいた。梢の兩親は彼等がまだ若かつた頃、ろまんちつくな空想と自由とを北國の曠野に見出すために、南の方から長い旅をして來たのであつた。そしてこの曠野の片ほとりに僅かな土地を買つて、赤い窓を持つたふたりの棲家(すみか)を建てた。そこで彼女は梢を産んだ。梢が九つになつた時、父親が死んだ。まだほんの子供であつた梢は、父の死を何の感情もなしに思出して、咽喉をこくりと言はして、父さんは死んだわよと玉次郎に話した程であつた。母親が泣くので貰泣きをしたが、それはすがすがしい悲(かなしみ)であつた。今母の死に逢つて、梢は泣くことを忘れた人のやうに、ただ言ひがたい寂寞(せきばく)の感だけを感じるのであつた。こつとりと頤の落ちた母の死顔を、梢はただ無感覺に眺

めてゐた。

8

父のかみよ　そのなみぢを
すくひのふねにて　わたりゆかなん
ふるさと　ふるさと
こひしきふるさと　ややにちかし

簡素な告別式を終へた敎會の椅子に、梢はひとり殘つて默禱してゐた。さつきの挽歌の歌聲(うたごゑ)がまだ耳の中で、ふるさとふるさとと聞えてゐた。この時、梢の坐つた椅子のもたれ木に手をおいて、感傷的な作り聲でものを言ひかけたものがあつた。それが寺田牧師であることを梢は知つてゐた。

「天國へ召されてゆかれたのです、神の意志を悲んではいけません」

「母の死を悲んでなんかゐません」梢はさう思つたが、口に出して言ふ氣にもなれ

なかつた。

「母が生前お世話をかけたことを更めてお禮を申します」梢は自分にもよそよそしく聞かれるほど無感覺に、一應の禮だけを述べた。

「そのお禮を受けるのは、もつとさきにして下さい。梢さん、あらためて聞きますが、あなたはこれからどうなさるおつもりですか」と牧師は果して話をそこへ持つてきた。どうするつもりかと梢の意見を求めたのでなく、牧師自身の計畫を私に實行させようとしてゐることは明かであつた。

9

「まだ悲みの中においでのあなたに今後の方針など尋ねるのは、あなたには御迷惑なことは知つてゐます」牧師はちよつと皮肉に出て「しかし、お母様が私に言置かれた言葉もあり、かたがた今日は最も好い機會ではないかと考へるのです」

「母があなたに言遺したといふのはどんなことなんでせう。まづそれからお伺ひし

たいとおもひます」

「それを知りたいとお思ひですか。では私の――いやお母様の意志を容れて下さるのでせうね」

「それを容れるか容れないかは問題が別ですわ。私はただ母の遺志を聞きたいのです、それが母への義務だとおもひますから」

「それを聞く義務をお感じになるなら、それを實行する責任も同時にお感じになるわけですね」

「私に出來ることならば。でなければ、いくら母だつて私にどんなことでも强ひてさせるわけはありませんわ」

「私の見るところでは、それはあなたが最も望んでゐられる――いやかういふ言方が僭越なら、あなたのために最も幸福な道だと信じてゐます。その道を拓いてあげるのが私の義務でもあるのです」

10

「私のために最も幸福な道？」そんな道が梢のまへにあらうとは、梢は信じなかつた。一體、幸福といふものが何であるか、幸福が人間の生活の中にあるといふことすら、もはや梢には信じられないことであつた。

「私は幸福など今はもう望んではゐないのです。今度歸つてからまだ母とは殆んど何も話合つたことがありませんし、ただ母の心持だけをせめて聞いてやりたいと思つたのですわ。あなたは母の言質をとつて、それで私を苦しめようとなさるのです。私はもう強ひてお尋ねはしませんわ」

梢がきつぱりさう言ふと、牧師は慌（あわ）てた。

「いやいや、私はそんなつもりではないのです、梢さん。あなたがどんなに幸福に背をお向けになつても、あなたのために好いことなら私はお勸（すゝ）めしないわけにはゆかないのです。それでは率直に申しますが、あなたは結婚なすつてはどうです」牧師が

いささか命令的に出てきたのに、梢は驚きながらすぐ尋ねかへした。

「誰とです」

「あなたもよく御存じの青木君、玉次郎君です」この牧師の答は梢にとつて、全く新しい驚きだつた。梢は思はず、ぢつと寺田牧師の顏を見つめた。

11

梢はそれが何事であるかを知らなかつた。恐ろしい暴風の中に、狂暴な體力と烈しい熱い吐息とを感じながら、野蠻な男性の威力に壓倒せられてしまつて、意識を失つた肉體がそのためにどんな變化を來したかを知らずにゐた。だからこの事が女性の未來に何を意味してゐるかを感じるには、梢はあんまり年が若くそして清淨であつた。

これまでに寺田牧師が、なみなみならぬ好意を梢によせてゐることは、梢にわかつてゐたばかりでなく、若い他の信者がひそかに嫉妬するほど、この町の人達の噂にのぼつてゐた。梢はそれも知らなかつた。心のあまりに清淨な者は、他人の惡意や不德

の誘惑を氣づかないものだ。梢の場合が恰度それで、牧師のとりつくなどはじめから感じなかつた。

それに梢の自由な小鳥のやうな快活な性情は、多くの男性の中を無邪氣に飛廻りながら、なんの危險をも感じないでゐた。

ある年のくりすますの前夜のことであつた。教會の唱歌隊が明日の演奏の稽古を濟して家に歸らうとするところで、梢は牧師に呼ばれてその部屋にひとり殘つた。

牧師はそこで自分の境遇と地位とを利用して、一人の女性に自分ひとりの出來心の愛欲を强ひた。

12

梢が、處女性を失つたことを自分に悔い、そのために心を痛めるやうになつたのは梢の玉次郎に對する友愛が、いつの間にか戀愛にならうとする頃であつた。

「遠くなれば思はずなる」といふ諺があるが、梢と玉次郎の仲は、逢ふ機會が少く

なるに從つて、愛情の芽がだんだん成長してゆくのを梢は感じてゐた。二人が道で出(で)會(くは)すことでもあると、まともに顔を見合すことが出來ないで、眼を伏せて通るのだが肉體(からだ)全體に互の全愛情を感じ合ひながら走るやうに行き過ぎるのであつた。玉次郎を見ない日が重なれば重なるほど、梢の心は玉次郎の方へ引かれていつた。

玉次郎の母親が失くなつてから、玉次郎の着る衣服(きもの)だけは、梢の母が昔のよしみを忘れずに、手にかけて縫つてやつた。梢も、玉次郎の絣の袷の袖を手傳つて縫ひながら、着物の形がだんだん出來上つてゆくに從つて、生きた玉次郎を身近く感じて、なつかしさに胸が一杯になるのであつた。玉次郎の姿を胸に畫いてゐるうちに、ふつと「あの事」を思ひつくと玉次郎のことを思ふさへすまないやうな氣がしてどこにもたれにも自分の心を託する人がないやうに思へて、果敢なく悲しかつた。

13

二人は何も言はないで、すこし離れて草の上に坐つてゐた。草原のすぐ下は林檎畑になつて、林檎の茂みを越えて、町の屋並(やなみ)がでこぼこに連つてゐた。入江の先きには遠い山が果もなく重つて見えた。玉次郎は夢のやうに遠くの地平線に眼をやつたまま梢の方へ話しかけた。

「梢さん」

「え」

「東京へ出るといふ噂はほんたうですか」

「いいえ」梢はすぐにはつきり答へた。「誰がそんなことを申しまして？」

「寺田先生が言つてゐました」

「先生はいつも私に東京の學校へ入るやうにお勸めになりますわ。だけど……」

玉次郎は、言葉の續きを待つてゐた。しかし梢は、それなり膝のまへの草の葉を引張りながら、いつまでも何も言はなかつた。

「先生は、梢さんの音樂は天才的だと言つてゐました。ぼくもさう思ふ」

「まあ」梢は頰を赤らめた。「あたし東京なんかゆきたくありませんわ」
「どうしてです？」
「どうしてですか、ただ」
「なにか譯があるんでせうか」
「いいえ……ええ……なんだかわかりませんわ」

14

梢はしばらくしてから、突然、玉次郎に訊ねた。
「あなたはあたしが音樂學校へ入ることを賛成なさる？」
「その方が好いと思つてゐます」
玉次郎にさう言はれて、梢は嬉しくも思つたが「でもあたし、あなたに別れるのはいやです」さう言ひたかつたけれど、何か梢にさう言はせない遠慮があつた。梢はまた默つてしまつた。

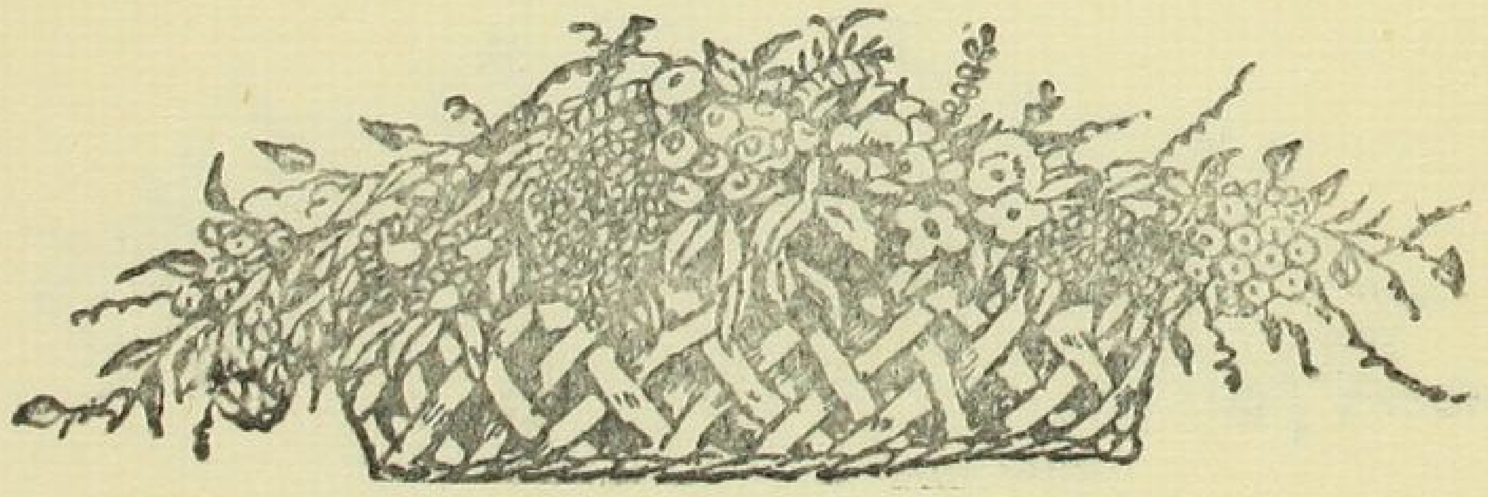
それきり梢は玉次郎に會ふ機會もなく、東京へいつてしまつた。東京へ出ることは梢の意志ではなかつたが、寺田牧師の誤解された愛から逃れるために、一つには、玉次郎に對する戀ごころもの苦痛を捨てるために、母親だけに別れを告げて、私かに、この町を立つたのであつた。それは心のふるさとへの放浪の旅であつた。
あれから數年、數奇の日を經て、今日再び生れた町へ歸つてきて、昔の初戀の人が自分と結婚することをきいて、梢の心はうごいた。しかしそれはあの頃の純情からではない、何か不純な好奇心から男を弄ぶ心から、寺田牧師に約束した。
「先生、ではとにかく青木さんに逢つて見ます」

この物語もこれきりで後が書いてないのです。それから梢がどうなつたか、神樣の外知るよしもありません。

露臺薄暮

見出し

本のはじめに
春のくる道
春の貢
春の夜の髪
忘れた手套
ゆびきり

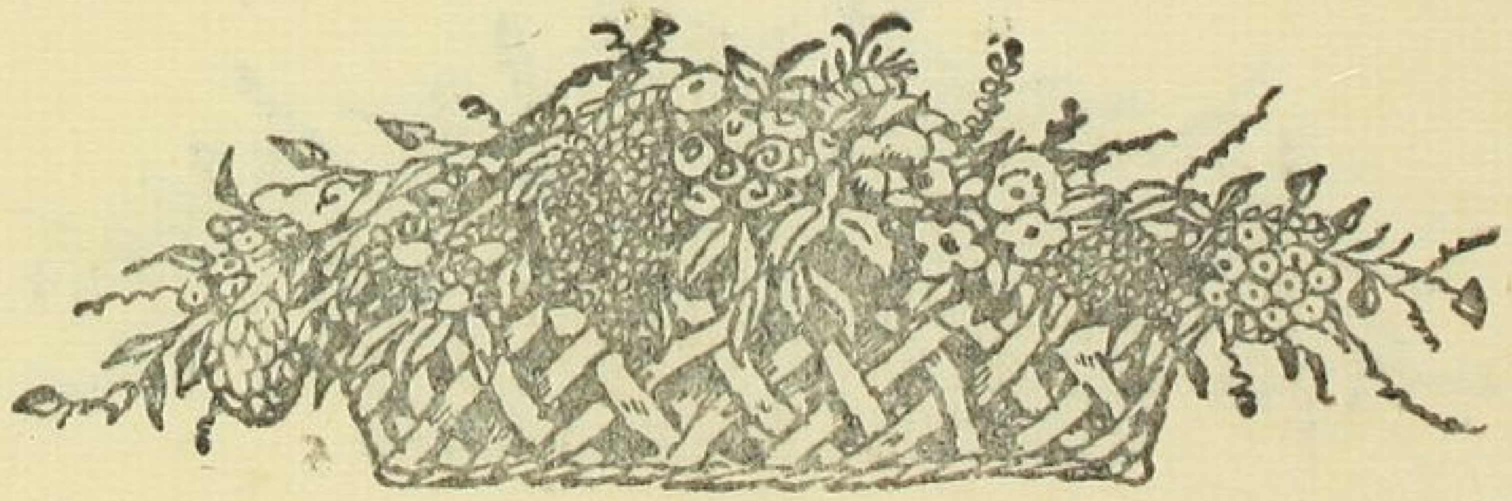


月日
幸福の日に
言葉
さんた・まりあ
童話二篇
野菊
砂文字
女郎花
露臺の雨
あけくれ

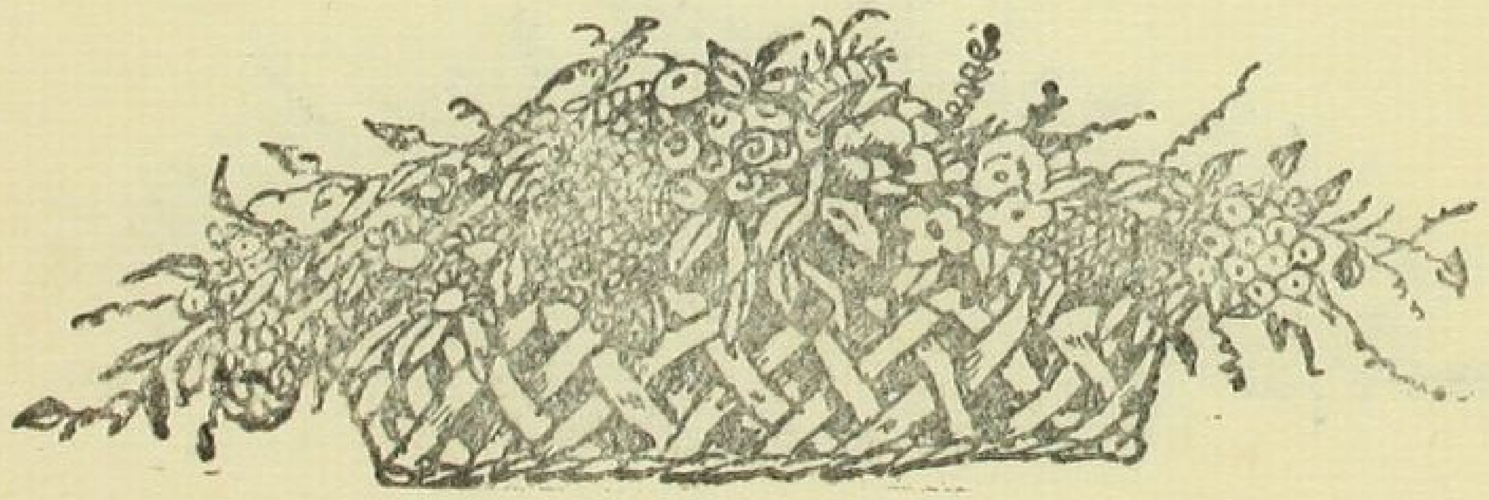
古風な戀
綾絲手鞠
櫛ひき
紅ほほつき
春日小景
手
寢床
垣根
冬のけしき
街の子

朝

緑の原
忘れえぬ少女
閉された窓
青き繪の具
貧しき巷の女へ
春のあしおと
遠い山川
他郷のゆふぐれ
夢とはあと



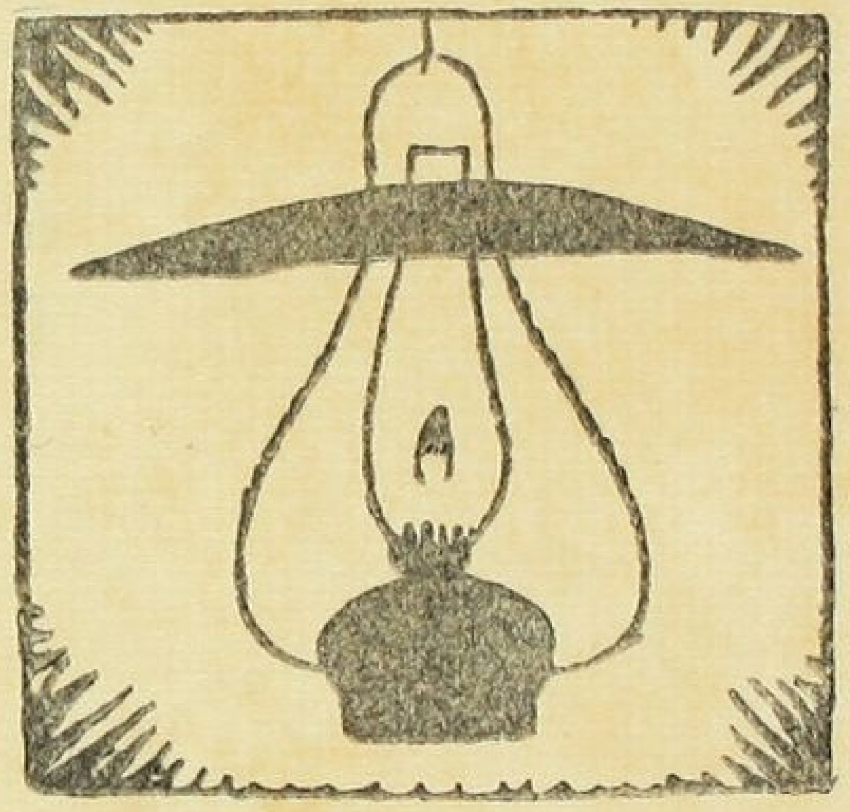
秋の畔
櫻の園よ　さようなら
飛ぶ春
逝く春
窓へ
わかれ
約束
昨日の夢
東京は戀し
「娘と人形」へよせる



死都哀話
壁畫
再生
赤い地圖
廢園
暦
生るるものへ
越しかたゆく末
動かぬもの
殘つたもの

遠い戀人
あの子この子
昔を今になすよしもがな
春の眼
手紙のくる路
幾山河
青い花
曠野の子

（これだけ）



昭和二年十二月二十八日印刷
昭和三年一月一日發行

定價金貳圓

露臺薄暮

著作權之章

著作者　竹久夢二

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行者　和田利彦

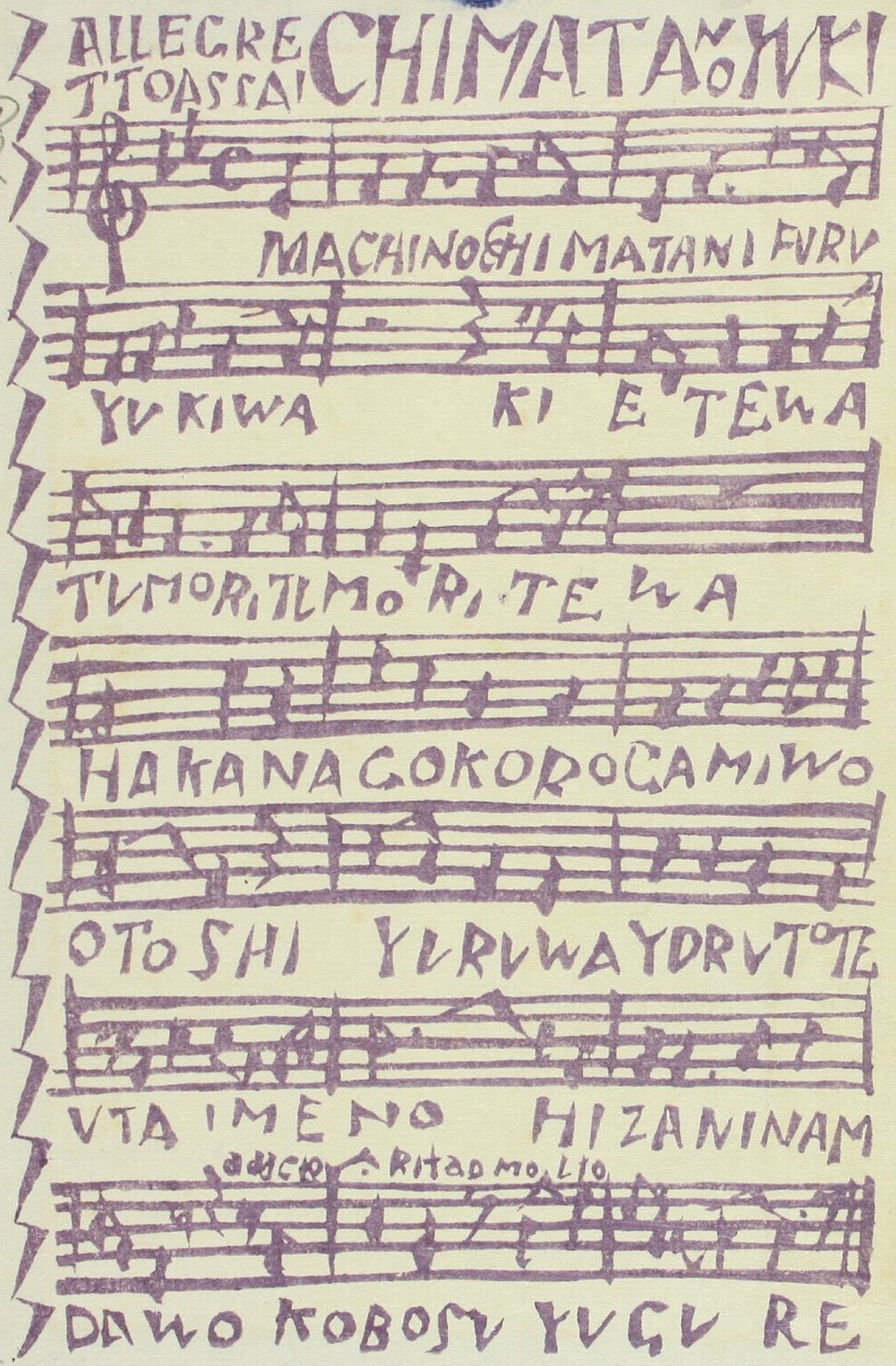
東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者　龜谷亘一

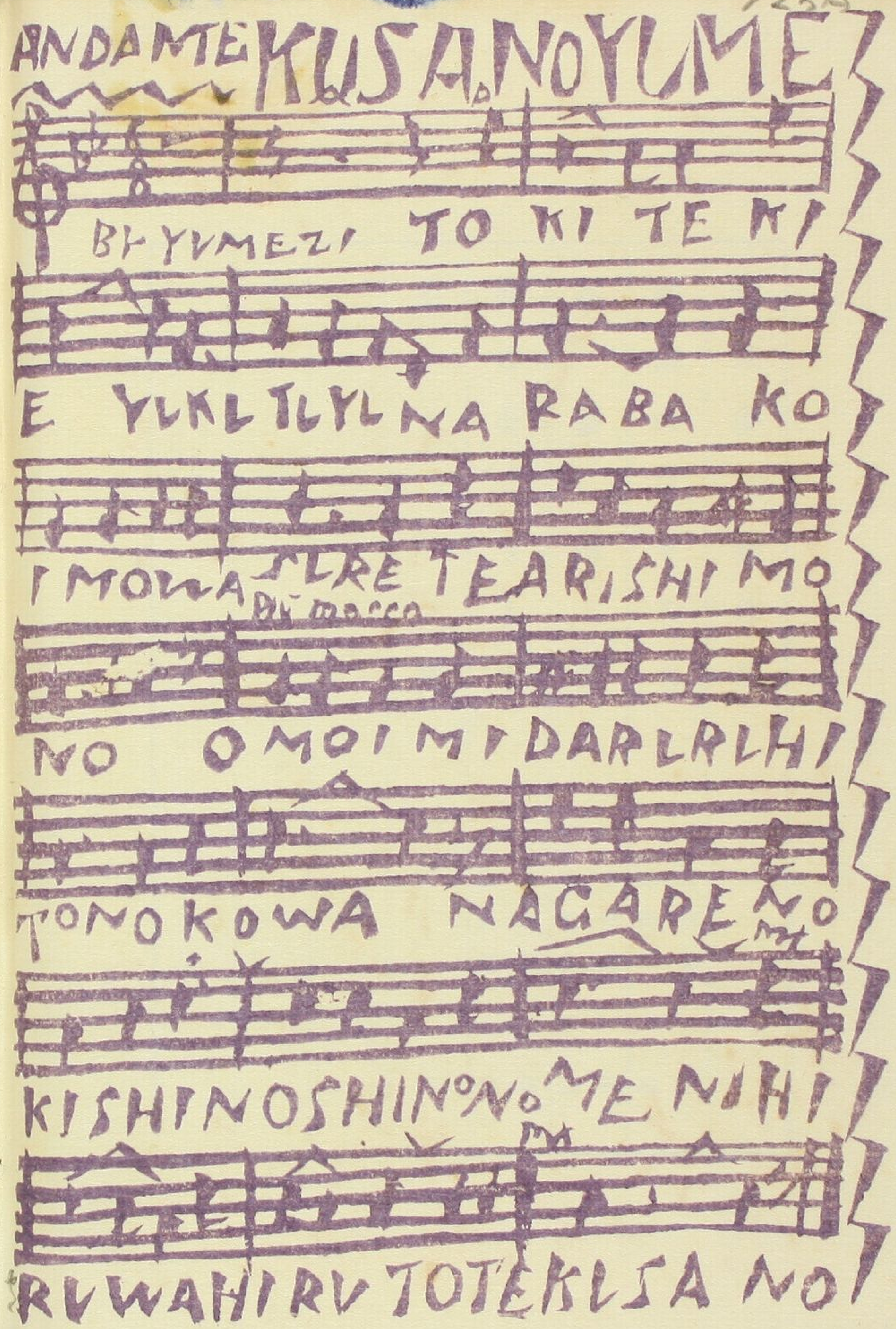
東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
振替東京一六一七
電話京橋 六五二番 四四一五番

竹久夢二著作集

露地のほそみち	定價參圓　送料拾八錢
露臺薄幕	定價貳圓　送料拾八錢
春のをくりもの	定價貳圓　送料拾八錢
出帆	近刊


ALLEGRETTO ASSAI
CHIMATA NO YUKI
MACHINO CHIMATANI FURU
YUKIWA KI E TEWA
TUMORI TUMORI TEWA
HAKANA GOKORO GAMIWO
OTOSHI YURUWA YORU TOTE
UTA IMENO HIZANINAM
DAWO KOBOSU YUGU RE


ANDANTE
KUSA NO YUME
BI YUMEZI TO KI TE KI
E YUKI TUYU NA RABA KO
I MOWA SURE TE ARISHI MO
piu mosso
NO OMOI MI DARERU HI
TONOKOWA NAGARE NO
KISHINOSHINONO ME NIHI
RUWAHIRU TOTE KUSA NO